

F・W・シエリング

『啓示の哲学』

第三書（19）

諸岡道比古

294

第三十六講

キリストの業が地上でなされた時、キリストが予見し、彼の弟子たちにも語つたことは、キリストの地上での行状の時間が存在したそのような時間が持続しえないし永続的に留まりえないだろう、ということである。あなたがたが人の子の日々を一日でも見たいと熱望する日と時とが来るであろうが、あなたがたはその日を見ないであろう、とキリストは言う⁽¹⁾。なるほど異教の完全な廃止まで、異教の暗闇的諸権威に対するなお存続する戦いの中で、特別な授かり物もなお持続するはずであるが、しかし極めて才氣あふれた使徒パウロは、彼が霊的授かり物について語る場所で（『コリントの信徒への手紙一』）、予言、言葉そして認識つまり *ec mentis per gignoscomen* 「なぜなら、私たちは部分的に知る」という言葉が暗示しているように、意識の部分的状態にのみ基づく *gnosis* 「知識」が止むであろう時点を告知する⁽²⁾。というのは、私たちは、意識のこの特別な状態が認める限りにおいて、ただ無条件的ではなく、自由ではなく、普遍妥当的に

295

ではなく、認識しなければならないからである。——しかし、完全なものが到来する時、その時にはあらゆる部分的なもの、つまり、なお不完全で、なお生成し続けている状態の帰結であるものすべてが終わるのである。『同書一三章一節』。異教のなかで意識が従属していたあの緊張が廃むと共に、ただ異教的なものと対立するキリスト教的なものが想定した超自然的なものも廃むはずである。ノ束の間のもの、従属的なものそしてせいぜい手段として承認すべきものと、使徒が十分にはつきりと意見を述べる忘我的状態 *ekstatische Zustände* はそれ自身、キリスト教的原理に對する戦いにおいて宇宙論的諸権威が引き起こす緊張に基づいていた。——これらの状態は当然廃み、そしてあらゆるものをまします。まったく自由で完全に自覚した、人間の認識 という軌道へ乗せるはずであった。確かにキリストは弟子たちに、彼らと一緒に日々の終わりまでいることの約束を与える「マタイによる福音書」二八章二節・・・わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。しかし、この「彼らと一緒にいること」

は、いかなる場合でも、そのことが キリストによりこの世に蒔かれた穀粒が自然に発芽すること を阻む、という種類のものではなかった。キリスト教が世界の中に入ってきたことによって、キリスト教は、あらゆる展開が世界の中で従属する普遍的な諸条件や諸法則にも従属しなければならなかった。キリスト自身自らを 種を蒔く人 と比較し、福音を種と比較する。それどころかキリストははつきりと『マルコによる福音書』四章二六節「から二八節」。「・・・神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに種は芽を出して生長するが・・・土はひとりでに実を結ばせるのであり、・・・」、人間が種を地に蒔き、そこから去り、寝また起き、そうする間に、この人がそれに注意することなしに、実が自ずから生長するように (automate par le g  cataphore) 「それゆえ、ひとりでに大地が実を結ぶ」、神の国もまたそうである、と云う。キリストが自らの生、教え、苦悩そして死を通して永遠にまで成長する生の芽を置いた後に、彼は、この芽が破壊されえないことやこの芽に内在する力を頼りにして、この芽がこの世界の嵐のもとで、つまり変わりやすい日光と雷雨のもとで、根を張り、蔓延し、連続的に抑えがたく成長することを欲した。自然で必然的な成長法則からこの芽を引き去ることが意図ではなかった。敵がやって来て、小麦の間に雑草を蒔くであろう。雑草は、同時に小麦と一緒に引き抜くことなしには、引き抜かれえないであろう。したがって、刈り入れの大いなる日まで一緒に成長することが許されねばならないであろう、とキリストは自ら言う (『マタイによる福音書』一三章二四節・三 節「・・・敵の仕業だ」と云った。・・・

毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。・・・)。キリスト自身 (『マタイによる福音書』二四章二四節「偽メシアや偽預言者が現れて、大きなしるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちをも惑わそうとする・・・」) や一層はつきりと使徒たちは、多くの偽使徒たちが出現するであろう。忌まわしいことがやって来るに違いない。それどころか、大いなる徹底的な背教つまり真なるキリスト教からの普遍的な墮落が将来想像される、ということを知する。ノそれゆえ、キリスト教の展開は、あらゆる自然的展開が曝されているのとまったく同一の妨害、制止そして他の災難に曝されている。

(1) 『ルカによる福音書』一七章二二節「・・・イエスは弟子たちに言われた。『あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし見ることはできないのである。』」。

(2) 一三章八節以下「・・・預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。」

キリスト教の進展はキリストや使徒たちによって何の中に置かれたか、と問われるならば、進展は¹⁾あらゆる民族のもので一般的な伝播にあった。「行って、全世界に福音を伝えなさい」『マルコによる福音書』一六章一五節。・・・全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。』しかし、同様にまた²⁾キリスト教の内面的な成長、しかも特にキリスト教的認識の成長が要求される。確かに、イエス・キリストが置いた以外の根拠を誰も置くことはできないが、キリストのあとにやって来た霊が初めてあらゆる真理のうちに、すなわち、まったく完全な

真理のうちに導くはずであった「ヨハネによる福音書」一六章一三節。・・・真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をこことく悟らせる。・・・」したがって、キリストによって置かれた根拠の上に、次第に人間的なものをすべてを包括する組織が築き上げられ、使徒が言うように、聖なる神殿へと、つまり神の眞の靈的住まいへと成長するはずであった「コリントの信徒への手紙二」五章一節。・・・地上のすみかである幕屋が滅びても、神によって建物が備えられることを、私たちは知っています。」この住まいからは当然何もかも閉め出されるには及ばなかったし、この住まいの中では、人間の努力、意欲、思考そして知すべてが完全な統一「性」へともたらされた。キリスト教世界は認識の中で成長しなければならなかったが、この認識は、啓示によって、それゆえ特別な関係によって使徒たちに与えられたような種類の認識でもあるべきではなかった。この認識は、あらゆる状況の下で、あらゆる時代とあらゆる場所で、人間にとって可能であり手に入れうる認識でなければならなかった。手短に言えば、一般的な人間の認識、それゆえ自由で学問的認識であるべきであった。使徒たちの時代のすぐ後の、自由なキリスト教的認識の異常な弱さ以上に、もはや何ものも、驚嘆を引き起こすのに向いていない。使徒たちの書き物と使徒「時代」後の最初の時代に帰せられた書き物との間以上に、大きな隔たりはない。それは、使徒たちの口を通して語られた自由で人間的な認識とは異なるものがあったこと、しかもその上後者の書き物は、キリスト教が導き入れた過程の影響や示唆Inspirationのもとに立っていた、ということの明白な証明になる。神の大いなる刺激に最も深い弛緩が直接ど

297

うして続くか を明白に認識させる、いわゆる使徒教父たちの多くの者に見られるキリスト教的意識のなんたる弱さよ。

／それは、神の国がまだ単に内面的であつたことも、まったく別の事柄であつたし、神の国が今や外面的にも現存在すべきであつたことも、別の事柄であつた。ここ「この世」ではこの国は、内面的に勝利したが、まさにそれゆえに、キリスト自身が言つたように、今や外へ（外面的なものへ）投げ出された靈の作用領域へやむをえず新たに入っていかなばならなかった。この靈はここで――外面的なものにおいて――、変化した形態のもとで新たな支配を求め、それつまりキリスト教に公然とあるいは変装して反対した。

キリスト教教会の内面的な運命と外面的な運命の帰結においてたとえ法則が発見されたとしても、しかも、ひよつとして、あらゆる歴史的展開において普遍的で支配的な法則に類似な法則が発見されたとしても、それは極めて望ましいことであろう。ところで、現在の講義は、この講義によって基礎づけられた諸理念を携えて、教会史へと移り、教会史の個別的なものへ入っていくことを私たちに許さないとしても、しかしながら少なくとも、おそらく導きの糸は発見されるであろうし、またあらかじめ、必ず一般的に次のことが洞察されるであろう。すなわち、教会を一種の理想的な純粋性と完全性において考えることになっている場合、教会の最初のあるいは最古の状態が教会の規定ではありえなかったということである。主が教会に認めたことは、教会がこの状態から出現し、そしてその他の混乱に關わつた、ということであるので、このことが主の意図に反しては生じなかつた、ということを

私たちは前提しなければならぬ。それは、教会はこの混乱から再び現れ、戦いと勝利とによって初めて真の確証されたものを獲得するであろう終わりへと到るし、一方、たいそう多くのより新しいものたちが取り戻そうと思うあの時代は無垢で潜在性の時代としてのみ、つまり教会の歴史のまだ外あるいは前の時代として考えられうる、ということの主が確かに配慮しえたことよってである。教会の歴史以前の状態は教会の真の、したがって永続的な状態ではありえなかった。そうでなければ、教会はこの以前の状態から出現しなかったであろう。この最初の状態が統一の状態であつたが、しかし単に消極的な統一の状態であつて、この状態から教会は現れなければならなかつたし、それに対して、現在の状態が分離の状態、つまり自由で積極的統一への移行にすぎないと言われうる。私たちは教会の歴史以前について語るのも、それゆえ、教会の歴史と——その歴史以後——「」が存在する。／歴史以前の教会にも（この世Aeonには含まれない）歴史以後の教会にも私たちは関わらず、歴史的教会に関わらなければならない。歴史的教会がようやく始まるのは、それ自身が世界宗教となり、世界にその存在Existenzを持つた瞬間である。この歴史的教会には諸々の違いがあるに違いないし、この教会には諸時代の帰結があるに違いない。それゆえ、問いは、教会のこれら諸時代がいかんにより明確に述べられ、より詳しく証明されるか、ということとでのみありうる。最も願わしいことは、主自身がこれら相違を述べている場合か、あるいは相違を将来の留意のためにあらかじめ示しておいた場合であろう。それゆえ、私は今この探究に入るだろうが、この際もまた、ア・プリオリな単なる理性的判断に満

足するのではなく、歴史的にことを進め、しかも私がこの講義全体でのやり方にしていたように、目的のための最も単純な手段を選ぶであろう（1）。

（1）私が見出したものを伝達する以前に、私が注意しなければならないと思うことは、私の見方が全体においてばかりでなく、この見方から私がしてよいと思つていた適応の大部分が、ネアンダー博士（Johann August Wilhelm Neander 1789-1860 ドイツの教会史家。ダヴィット・メンデルDavid Meißelと称していたがプロテスタントに改宗後表記名に変更）著『キリスト教と教会の一般史』の最新巻（第五巻一部四三八頁以下）によって予期せぬ確証を得た、ということである。名を挙げられた研究者はこの同じ見方や適応を、フロリスの有名な大修道院長ヨアキム（Joachim Flora）1136頃-1202 イタリアの神秘主義思想家）の書物の中に見出し確証した。明らかに私は、私が多く見てきた以前の教会史のいかなるものの中でもこの発見がなされていないのを見出した。他人を好んでその人に応じて判断する無内容さが、そうすることで私から何かが奪われる、と考えるとしても、むしろ私が喜んでいるのは、私がいささかためらいながら考察しなければならなかつた思想が、たいそう大きな確証になったこと、つまり、すでに一二世紀の中葉あるいは終わり頃には、「シェリングの意見と」似たもの、しかも部分的には完全に等しいものが現れていた、たいそう重要なしかも教会史で秀でた人物の意見と一致するようになったことである。

あらゆる状況が重大で重要な物語は注意深く読まなければならないが、注意深くイエスの人間的生「活」の歴史を読んだ者がおそらく気づいたことは、ある祝祭の折には、通例キリストが弟子たちのうちでしかも将来の使徒たちのうちの三人を呼び寄せ、そうして他人たちの前で、ペトロ、ヤコブそしてヨハネを特別扱いしたということである。ペトロ／つまり本当はシモンが最初の弟子であつた。彼をキリストはそもそも自分のもとへ彼と一緒に同時に彼の兄弟アンデレ（『マタイによる福音書』四章一八節、二節「……二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟

アンデレが、・・・漁師だった。イエスは、「わたしについて来なさい。・・・」を呼び寄せた。より早くに招集することのみがペトロを特別扱いする原因ではない、ということは、アンデレが三人の中には入っていない、ということから明らかである。この呼び寄せのほとんどすぐ後に、「呼び寄せられた」次の者たちはまた二人の兄弟であり、一人は至る所であらかじめ名前が挙げられていたヤコブであり、もう一人がヨハネである。ペトロと共にこれら二人こそ、それゆえ、キリストが特に自分のところへ引き寄せ、最も密かに優先する腹心の者たちである。というのは、キリストが十二人を使徒たちにする時——それゆえ、彼らの使徒的使命が本来的に始まる時——（マルコの物語において（三章一四節以下）・・・十二人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くために、また、派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせる・・・。シモンにはペトロという名・・・。・・・ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、この二人にはボアネルゲス、すなわち、「雷の子」という名・・・。アンドレ・・・）彼らの召命の単なる年代的順序に反して、あの三人がまた、他の者たちに先立ち、アンデレはヨハネの後に初めて呼ばれるからである。また注目すべきことは、キリストがこれら三人にのみ特別な名前を添え、シモンにはペトロという名前を、二人の兄弟ヤコブとヨハネにはボアネルゲスすなわち雷の子らという名前を与えることである。——使徒の職へ彼らを任命した後すぐに、ユダヤ人の教会堂の主宰者がイエスのもとに、自分の娘が死に瀕している、とイエスに言うためにやって来る。その後で、娘はすでに死んだ、と告げる下僕がやって来る。イエスは、「恐れるな。ただ信じよ」

（『マルコによる福音書』五章三六節「イエスは・・・「恐れることはない。ただ信じなさい」と会堂長に言われた。」）と言いながら、それにもかかわらず、その人の家に行く。ここでは（三七節「・・・ペトロ、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれもついて来ることをお許しにならなかった。」）こう言われる。彼は誰にも（この「使徒という」身分において彼に今すでに付き添っている十二使徒の誰にも）、つまり彼はペトロ、ヤコブそしてヨハネ以外の誰にも付いて来させなかった。それゆえ、イエスははっきりと、彼と一緒にいくことを、他の者たちに禁じなければならなかった。ルカも同一の出来事を物語っている（八章五一節「イエスは・・・ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、それに娘の父母のほかには、だれも一緒にはいることをお許しにならなかった。」）後にイエスは三人を自分の変容の目撃者にする高い山の上で、再び彼らを自分のそばに帯同する（マタイが言うように（一七章一節「・・・イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。」）、*cat. idian*「自分たちだけで」、それゆえ、他の者たちを除外して——、マルコ（九章一節「・・・イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、・・・」）は *movous* 「彼らだけで」、彼らだけで、と言つ。イエスがオリブ山での最後の戦いの目撃者として連れていったのも、また三人である。キリストの昇天後も、この順序で名前が呼び上げられるが（『使徒言行録』一章「一二節」——三節「使徒たちは、「オリブ畑」と呼ばれる山から・・・それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、・・・」）、これら三人ペトロ、ヤコブそしてヨハネのうち、ペトロは抗弁の余地なく第一の者であ

り、キリストによってもそのような者と見なされ説明される。／使徒たちがその順序で名前を呼ばれるマタイにおいて（一章二節）「十二使徒の名は……まずペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、……ヤコブとその兄弟ヨハネ、……」、シモンという名前を挙げられたペトロが明らかに *protos* 「最初に」位置する。この *protos* 「最初に」を単に副詞として定立されたものと見なそうとしないならば（第一にと同じ）、ここには特別扱いがある。というのは、ペトロがすでに最初に名前を上げられていることによって、このものは不要であつたであろうからである。最初の者としての彼に、普通冠詞 *ho Petros* 「ペトロ」が付けられるが他の者たちには付けられないか、あるいは付けられても稀である（一）。ペトロはたいいて他の者たちに代わって話をするし（二）、他の者たちが名前を挙げられない時に、一人名前を挙げられる（三）。キリストがペトロを非難する、キリストの話の中ですら、このことがある方法で、つまり、キリストがペトロを他の者たちの頭と見なす、と認識される方法で生じる。例えば、シモン、シモン、サタンはあなたがたを渴望し、サタンはあなたがたを、小麦のように、ふるいにかけてがつていゝる。しかし私はあなたがたのために、あなたの信仰が止まないことを祈つた。そしてあなたがいつか回心したら、あなたの兄弟たちを強くしなさい、という話の中である（四）。キリストはここでは曖昧にすべての者に話しかけるが、しかしながら、頭としてのペトロに、単に頭の墮落は他の者たちの墮落を引き起こすであろうという話を向けている。ふるいにかけることの比喩は、通例のように、使徒たちをこちゃ混ぜにしたり混乱させたりすることから理解されうるのではなく、

サタンはここでも、粉殻を分けるために、小麦をふるいにかけるように、正しいものの間に隠れている不正なものを分け、除去させようとする者として振る舞っている。

（一）例えば、『マルコによる福音書』九章二節「……ペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、……。三人全員に冠詞が付けられている」においてそうであるが、本書「三章三節」「……ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、……。三人全員に冠詞が付けられていない」では三人すべてに冠詞がない。

（二）「ルカによる福音書」八章四五節「イエスは、……言われた。人々は皆、自分ではないと答えたので、ペトロが、……と言った。」「マタイによる福音書」一六章一六節「シモン・ペトロが、「あなたはメシア……」、使徒言行録」一章一五節「……ペトロは兄弟たちの中に立つて言った。……」、二章一四節「……ペトロは十一人と共に立つて、声を張り上げて、話し始めた。」「一五章七節「……ペトロが立つて彼らに言った。……」

（三）『マルコによる福音書』一章三六節「シモンとその仲間はいエスの後を追ひ」。

（四）『ルカによる福音書』二二章三一節、三三節「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願つて……」。

人々が彼（人の子）を何と見なしているか、という主の問いにペトロが他の者たちを代表して答えた後に「マタイによる福音書」一六章一五節「主がペトロに言つ、主の言葉が、ペトロと彼の優先にとつて、最も決定的に有利である。その時ペトロは、あなたはキリスト（メシア）、生ける神の子である、と答えた」「同書同章一六節」。それに続くのがあの人口に膾炙した答えである（『マタイによる福音書』一六章「一七節」「一九節」）。シモン、ヨナの子、あなたは幸いである。というのは、肉と血があなただけにこのことを明らかにしたのではなく、天にいる私の父が明らかにしたからである。私もあなたに言つ、あなたはペトロ

であり、この岩の上に／私は私の教会を築く。しかも地獄の入口も教会を圧倒しないはずである。私はあなたに天国の鍵を与えよう。あなたが地上で繫ごうとするものは、天においても離れるはずがない。あなたが地上で解こうとするものは、天においても解かれてはいるはずである。「ギリシア語 *petros* は石の意。ペトロは元来あだ名であり、後に個人名になったもの」。キリストのこの言葉は、使徒たちの間での聖ペトロの優位にとつて、完全に決定的なものである。その上あらゆる時代に、すでに宗教改革以前に試みられたように、これらの言葉が証明するものを誤解することあるいはこれらの言葉にこの意味とは別の意味を付加することには、党派的精神のあらゆる眩惑が必要である。けれども、別の面から私が同じ誠実さでもつて述べなければならぬことは、持続する優位のために、正しく理解された言葉から引き出された結論において、非常に異なる概念、先位 *Priorität* と優越 *Superiorität* とが混同された、ということである。ペトロにこれらの言葉によつて帰せられた優先 *Primat* あるいはむしろ首位 *Principalat* は、持続的で永続的な支配など含んではいない。反対に、キリストは、彼がその上に教会を築く、それゆえ、彼が彼の教会の基礎にしようとする岩と、使徒とを比較するので、この首位の概念は、建築物の基礎がまた最初の最も重要なものと名付けられうる意味を越えて広げられたりあるいは拡張されたりする必要はない。基礎はあらゆる建築物の最初のものであるけれども、基礎は、それゆえに、基礎が基礎づけるものを越えてはいないし、むしろ建物が始めて完成される「建物の」上物を必然的に前提する。基礎という概念は排他的であるどころか、この概念は、この概念が自らにしかも自

らの外に別なものを要求する限りにおいてのみ、むしろ自ら意義を持つ。有名な箇所をこのように説明することによつて、それゆえ私たちは、使徒たちの最初の者を継続の始まりや基礎と、詳しく言えば、始まりが単に自分自身を繰り返すのではなく、始まりに真に他のもの（他の原理）が続くようなものと見なしてもよい、ということを獲得した。しかもこのことで、私たちはこの展開全体に対して、総じてある歴史的な帰結を獲得した。キリストが彼の教会をその上に建てようと公言したそのものは、つねに基礎のままであるが、基礎は第二の原理、つまり新しい原理を／閉め出さない。しかも、この原理によつて、キリストに属する者たちの共同体はより高次のより自由な形態、つまり単に外面的なものとはまったく別の栄光へと導かれる。ペトロが始まりと規定されたので、第二の使徒が続ぎ、第三の使徒が終わりと考えられなければならない。聖ペトロに続くこの者は、つねに至る所で、彼に続く者として名前を挙げられている使徒ヤコブの中にのみ求められうる。けれどもこの者は、すべての使徒たちのうちで最も早く命を奪われたし「『使徒言行録』二章一節—二節。・・・ヘロデ王は・・・ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した」。しかも自らの主のために自らの血を流す最初の者、ということの真価を認められた。ヘロデス・アグリッパス [Herodes Agrippas BC 10頃—AD 44頃 ユダヤ人王。ヘロデス大王の孫] はヤコブを早くに打ち首にさせた。しかし、ヤコブは、彼の履歴や使徒「として」の働きの高さにもかかわらず、三人のうちでつねに第二の者として名前を挙げられるので、この「第二の者とする」ことが考えてもいいのは、この立場自体が、たとえヤコブが命じられていただけ

であるにせよ、この立場を他の者に対して維持するという意義を持っていた、ということによるのである。短い時間の後つまりヤコブの処刑の前、たいそう異常で驚くべき方法で使徒の職に召命されたパウロ以外の誰がこの他の者でありうるだろうか。主がパウロを選んだのは、最初の教会の迫害者で苦しめ手である者から教会の最大の拡大者で賛美者になるためである。聖ヤコブが命を奪われた時、ヤコブの代わりになるべき人物はすでに選ばれていた。それどころか、主は、主が使徒パウロをな一層決定的で壮健な道具としてその立場に据えようとしたがゆえに、おそらくたいそう早くにあの人「ヤコブ」を連れ去ったのである。ヤコブの立場は空のままにされずに、パウロの回心が生じたことによるほど異常な方法で、再び補充されたので、この立場と、ペトロによって果たされなかつた伝道とが、結びつけられねばならない。それゆえ、パウロは聖ペトロに聖ペトロを補完する肢体として付け加えられた。それは、事実また、教皇たちの鉛で造られた最古の印章の上で、二人の使徒が互いに並んでいることに、つまり、東洋的な方法にしたがって、上位の立場としてペトロが左側に、パウロが右側に並んでいることに見られたようにである。それゆえ、その場合、まず使徒ペトロのみが教皇たちの印章の中にいる後の時代まで、第一の者の独占的な優先は問題ではなかつた。

したがって、継続の線は今、ペトロ、ノパウロ、ヨハネのようになっている。これら三人の名前をキリスト教教会の三つの時代の代表者たちと考えることは、啓示の歴史的歩みが他の場所での様に認識されようとも、この歴史的歩みにまったく適っている、まったく同じ関係で、キリスト以前の時代に対しては、モーセ、

エリヤ、そしてパプテスマのヨハネが考えられる。モーセが基礎を置く。エリヤと共に、預言Prophetum（律法の反対）、つまり未来に向かって駆り立て媒介する原理が立ち上がる。パプテスマのヨハネはエリヤの後続者である。古い預言「見よ。主の大いなる日が来る前に、私はあなたがたに預言者エリヤを送るであらう」は「マラキ書」三章二三節。見よ、わたしは大いなる恐るべき主の日が来る前に預言者エリヤをあなたたちに遣わす。パプテスマのヨハネを送ることによって満たされたものと、キリスト自身によって見なされる。彼は来るはずのエリヤである、とキリストは言う（『マタイによる福音書』一章一四節「……実は、彼は現れるはずのエリヤである」）。モーセは、旧約聖書における、持続し固定した実在的で実体的なものの原理であり、エリヤは、展開し、生命を与え、運動しそして未だに認識されていない未来に向かって突き進む火のような精神である（『シラ書』四八章一節。そして火のような預言者エリヤが登場した……）。「パプテスマのヨハネ——彼について、女たちから生まれた者たちすべてのうちで、パプテスマのヨハネより偉大な者は生じなかつた。しかし、天国で最も小さい者である者は彼より偉大である、とキリストが言う（『マタイによる福音書』一章一節……女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかつた。しかし、天の国で最も小さい者でも、彼よりは偉大である。」——は、旧約聖書とキリスト以前の時代を終結させる。三人の使徒のうちで、ペトロはモーセに相似しているし、立法者であり、固定したもののStabileの原理であり、基礎を置く者である。パウロ——『シラ書』がエリヤについて、彼は

火のように突然現れ、彼の言葉はたいまつのように燃えた「シラ書 四八章一節。そして火のような預言者エリヤが登場した。彼の言葉は松明のように燃えていた。」と語るものを、人はパウロについて語ることが出来る「――」は、新約聖書のエリヤであり、教会における運動、展開、自由の原理である。使徒ヨハネは結局、パテスマのヨハネに相似しており、パテスマのヨハネのように、未来の使徒、つまり未来を暗示する使徒である（1）。

（1）山上での変容に際し、イエス自身がこの順序での第三番目の者として現象する「マタイによる福音書」一七章一節―三節。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、・・・モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。しかも、三人の使徒たち、ペトロ、ヤコブ（将来の使徒パウロの暫定的代理人として）そしてヨハネがこの現象の証人たちであることに応じて、ここでは（キリストまでの旧約の）過去と（新約の）未来との歴史全体が、つまりモーセ、エリヤそしてイエスによる前者の歴史と、三人の使徒たちによる後者の歴史とが明示された。

304
使徒たちの最初の二人を比較するならば、聖ペトロの精神の有り様Geistesartは、それが思想においてばかりでなく、彼の生活態度Seinsのいわば岩のようなこつこつしたものの中でも現れるように、まったく実体的な性格を示している。新約聖書の中で、ペトロは、再びまた、相対的に旧約聖書的な律法的原理である。使徒たちの誰も、彼ほど、遠く隔たった往時の暗黒さに真実のreellな説明を与えない。ペトロに固有なものは、例えば、キリストによって全世界に広げられた洗礼とノアの洪水との比較である（1）。この比較は、二つの時代の境目としての洗礼の意義と、おそらく同様に、ノアの洪水の本性「自然」とに関する深い説明を含んでいる。というのは、洪水で古い人類、つまりペトロ（ペトロの手

紙二二章五節「・・・神は昔の人々を容赦しないで、・・・」も名付けているように、archaios cosmos「最初の人類」が滅んだからである。すなわち、神々と等しいと自負する巨人のような以前の種族が落ちぶれ、現在種の人間が、つまり本来的に現世の人間がこの種族に続くからである。ノアの洪水において、独占的で実在の原理が死んだ。その時以来（本来人間の全時代あるいはディオニューソスの時代を通して）、第二ポテンツが支配した。この――自然的ポテンツとしての――ポテンツはキリストにおいて死んだ。洗礼により私たちは、パウロが言うように（2）、キリストの死において一緒に葬られた、すなわち、同じく自然的ポテンツの死において死んだ。洗礼と晩餐はその意義において単なるユダヤ人的なものを越えている。キリストは自分の死の直前に、彼自身が以前の関係すべてを再び思い出しうるように思える夕食をしつらえる。彼はどうやら次のように想起する。最初の神の独占的支配に続いた第二の時代の始まりにおいてのように、ここではパ

305
ンとブドウ酒という授かり物は、神との新しいより善き関係、つまり廃止された古き関係とは反対に、cainē diathēcē「新しい契約」の担保と見なされたように、キリストの肉体と血はキリスト共に始まる新しいdiathēcē「契約」の担保、つまりキリストの死によつて現れた、神との新しい関係の担保である（3）、とキリストは語る「ルカによる福音書」二二章一節。・・・私の血による新しい契約である。」――ペトロは、ヨハネが別の端で未来を見ているように、過去を深く見ている。ノアとペトロにおいて実体的なものが優勢であるならば、パウロの精神の性格はまったく活動的なものである。パウロの中では活動的な原理、つまり弁証法

的で学問的な原理、すなわち説明する原理が活動している。パウロは新約聖書の中でまた特に新約聖書の原理である。しかし、両者はお互いを前提する。ペトロは基礎のままであるが、しかしこの基礎が不毛なままでないならば、基礎の上に立てられねばならない。それゆえ、ペトロはパウロを必要とする。けれども、パウロもペトロなしでは何もでもないであろう。というのは、ペトロが基礎づけたものをまさに、パウロが展開し、基礎づけたものをその制限から、未来全体にだんだんと広がる作用によって、解放しなければならぬからである。パウロの異常な召命によって、ペトロから独立の、そのあり方において同じく自立的な原理

が設置された。しかもヤコブはおそらく、彼がこの関係の中に入り込んでしまつて、ペトロから十分に自由で独立していなかったであろうがゆえにまさに、自らの座をパウロに譲らなければならなかった。神の霊のgeistはあまりその能力において拘束されないで、霊は一樣にのみ作用しうるであろう。反対に、*di enantion*「反対している者たちを通して」、諸々の対立を通して、霊は最大のもを生み出す。——霊はあらゆる対立において力強いもの、打ち勝ちがたい一なるもののままである「コリントの信徒への手紙」——第二章「霊的な賜物」を参照。特に一節。これらすべてのことは、同じ唯一の「霊」の働きであつて、「霊」は望むままに、それを一人一人に分け与えて・・・」。

(1)「ペテロの手紙」第三章一節——二節。この霊たちは、ノアの時代に・・・水の中を通つて救われました。この水で前もつて表された洗礼は、今やイエス・キリストの復活によってあなたがたをも救うのです。・・・」

(2)「ローマの信徒への手紙」第六章四節「わたしたちは洗礼によってキ

リストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。・・・」
「コサイの信徒への手紙」第二章二節「洗礼によって、キリストと共に葬られ、・・・」

(3)「ブドウ酒の中には、この世界には属さない精霊のgeistが強制されて質料化されている（前巻の「第十九講」四三六頁参照）。同じく、キリストの血の中には、この世界に由来しなかつた霊のgeistが質料化されている。ブドウ酒が新しい時代のしるし（現象）であつたように、キリストの血は新しい時代、つまり*neue diathese*「新しい契約」の時代を示すし、新しい時代は先行するものに対して、先行する時代がその時代のものに關係したのと同じように關係する。だから、夕食でのブドウ酒とキリストの現実の血との間には自然で実在的な關係がある。またパンは後で世界に入つてきた要素である。その点でもちろん、パンとブドウ酒は、それらが恣意的なしるしである、という意味でキリストの肉体と血を意味するばかりでなく、パンとブドウ酒はキリストの肉体と血であるものである。ここには、パンとブドウ酒とキリストの肉体と血との単に外面的な關係ではなく、内面的な關係がある。このことが説明するのは、なぜキリストがなお生きて次のように言うことができたかである。これはこうである。というのは、キリストの肉体と血とは生きている、あるいは*echynomenon*「血が流されたもの」は別の時代のしるしであるからである、と。（傍注）。

二人の使徒がまだ生きていた間に、すでに対立がはっきりと現れていたが、しかし、その対立はキリストの中では一致していたというのは、キリストはあらゆる個々の時代を凌駕し、キリストはアルファとオメガ、つまり始めと終わりであるからである。

次の時代にペトロ的原理は支配「権」を手に入れた。ノアにパウロは「ローマの信徒への手紙」(1)で、この原理に、彼が置かなかつた基礎を承認する。それゆえ、ペトロがローマにいうようにまいと、事柄から見ても、ローマの共同体は前パウロ的、したがってペトロ的である。しかし同時に、パウロがほめかしていることは、異教徒たちのもとの福音の説教を熟知しているパウロがこの点で特別な自由を享受し、いかなる人間の權威にも結び

つけられていなかった、ということである。「ガラテヤの信徒への手紙」一章一節。人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、・・・神とによって使徒にされたパウロ。ここで彼にとつて適切で目的に適っていると思われえた以上にはつきりと、パウロはペトロから独立に別の箇所、つまり最も明確に『ガラテヤの信徒への手紙』の中で言明している「同書同章同節」。明瞭にしかもよく理解できるよう故意に、パウロは、福音をいかなる人間からでもなく、主からのみ受け取った、と説明する。「また私は、私の前に使徒であつた人々のもとに行くためエルサレムへ来たのではなく、アラビアへ引きこもり、そしてダマスコへ行った「ダマスコへの途上で突然の回心が起こった。現在ダマスコはシリアの首都」。それから三年以上後（それゆえ、彼の召命後長い間、しかも彼がすでに長い間、福音を力でもって告げ知らせた後）、私はペトロに会うためにエルサレムへ来た。そして十五日間ペトロのもとに滞在した。けれども私はヤコブ、つまり主の兄弟と名付けられているヤコブ（あの早くに命を奪われた者からよく区別すること）以外の他の使徒たちには会わなかった」とパウロは言う（二）。十四年後、ようやく再びパウロはエルサレムへやって来るが、使徒たちによって求められたなんかではなく、彼が言うように（『ガラテヤの信徒への手紙』二章二節「エルサレムに上つたのは、啓示によるものでした。・・・」）、cat' apocalypsin「啓示によって」、主の言いつけによってであつた。キリスト教に改宗した異教徒たちHiden=christenにモーセの祝祭で習わしの軛を課そうとした何人かの人々によって、引き起こされたこれらの集會に際しても、パウロは、彼が『コリントの

信徒への手紙二」（二章一節）「わたしは、たとえ取るに足りない者だとしても、あの使徒たちに比べて少しもひけはとらなかつた・・・」Eious hyper lian apostolous「はなはだ優っている使徒たち」、いわば使徒たちと名付ける以前の使徒たちからの自由と独立性とを、最もはつきりと意識して保持していたそれどころか、パウロは同じ『ガラテヤの信徒への手紙』（二章六節以下）「・・・この人たちがそもそもどんな人であつたにせよ、それは、わたしにはどうでもよいことです。神は人を分け隔てなさいません。・・・彼らはわたしに与えられた恵みを認め、ヤコブ、ケファとヨハネ、つまり柱と目されるおもだった人たちは、わたしとバルナバに一致のしるしとして右手を差し出しました。・・・」の中で、信望ある人々（Ious doountas einai ti「尊敬されている人々」）に関して、次のように言う。彼らが以前何であつたか（つまりキリストの以前の信奉者たち）は私には重要ではない。というのは、神は人物を考えに入れないからである。しかし私に（すなわち、私の認識と洞察によれば）この人たちは何も付け加えなかつたが、彼らは、ノペトロが割礼「を受けた人々」に対するように、異教徒たちへの福音に私が熟知していた、と見なしていたので、諸柱と見なされていたヤコブ、ケファそしてヨハネ（toi doountes stloi einai「尊敬されている人々は柱である」）は、私とバルナバとに右手を出した。そして私たちは、異教徒たちのもとで、しかも割礼「を受けた人々」の中の異教徒たちに説教すべきである、ということと一致した、と。

（一）一五章二節「・・・福音を告げ知らせようと、わたしは熱心に努めてきました。それは、他人の築いた土台の上に建てたりしないため

です。』『ガラテヤの信徒への手紙』二章七節、八節「・・・ペトロには割礼を受けた人々に対する福音を任されたように、私には割礼を受けていない人々に対する福音が任されていることを知り・・・」異邦人に対する使徒としての任務のためにわたしに働きかけられた・・・」を参照せよ。

(2)『ガラテヤの信徒への手紙』一章一七節以下「・・・わたしより先に使徒として召された人たちのもとへ行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。それから三年後、ケファと知り合いになるうとしてエルサレムに上り、十五日間彼のもとに滞在しましたが、ほかの使徒には誰も会わず、ただ主の兄弟ヤコブにだけ会いました。・・・」

しかし、ペトロが後にアンティオキアに来た時、パウロはペトロと決定的に対立した(『ガラテヤの信徒への手紙』二章一一節「・・・ケファがアンティオキアに来た時、・・・わたしは面と向かつて反対しました。」)。その時、私は彼に面と向かつて反対した。というのは、ヤコブのもとに二、三の者が(アンティオキアへ)やって来る以前に、彼は異教徒たちと一緒に食事をしていた。しかし、二、三の者がやって来た時、彼は退き、割礼を受けた「人々のなかの」人々への恐れから離れたからである。しかも彼と一緒に、キリスト教に改宗した他のユダヤ人たちも心にもないことを行ったり、バルナバすら彼らと一緒に心にもないことをするよう強要されたりした。それゆえ、私は、彼らが福音の真理にしたがってまっすぐに行動していなかったのを見たので、私はすべての人がいる前でペトロに言った。ユダヤ人であるあなたは、異教徒的方法で生活する。あなたが以前行つたように、なぜあなたは、ユダヤ人のような方法で生活することを異教徒たちに強制しないのか、と「同書同章一一節——四節」。——パウロが一般的に新しい原理として教会に受け入れられたことを、最も

明瞭な痕跡が示している。コリントでの共同体の中で(「コリントの信徒への手紙一」一章一二節によれば「・・・わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」「わたしはキリストに」などと言い合っている・・・」)、ある者たちはパウロの信奉者、他の者たちはアポロ(アレキサンドリアのキリスト教に改宗した教養あるユダヤ人)の信奉者、また他の者たちはケファ(ペトロ)の信奉者、他の者たちはキリストの信奉者と自称していた。パウロとアポロ、ケファとキリストがここでは一緒に並べられているので、パウロの教授法に新しい原理を認め、人々がコリントにはいたし、この人々にとってパウロがある程度まで新しい人であったが、また、矛盾によって悩まされたがゆえにまさに、キリストへ引き返した他の人々がいた、ということが見て取られる。——パウロの自由で大胆な、深いのはるかに進んだ意見の多くが、混乱させるよう作用しえたであろう、という感情は、『ペトロの手紙二』のある節によっても表明されている。ここではペトロは、パウロのすばらしい心情にその上適っている方法で、パウロの手紙に言及している。私はこれらの言葉を考えている(三章一五節、一六節「わたしたちの愛する兄弟パウロが、神から授かった知恵に基づいて、書き送ったこと・・・」)。その手紙の中には難しく理解しにくい箇所があつて、・・・)。つまり、私たちの愛する兄弟パウロは、彼に授けられた恩寵にしたがって書いたし、あらゆる手紙の中で書いているように、*en hais esti dynocia tina*「それらの手紙の中に難解なことどもがある」。別の読み方 *en hois*「それらのことにおいて。 *en hais*の *hais*は関係詞女性複数与格で、手紙を受ける。 *en hois*の *hois*は関係詞

中性複数与格」はより困難な読み方として取りうるかのように思えるかもしれない。ノ使徒たちの威信を傷つけると思われたものすべてを何と早い時期に隠そうとし、その結果、マルコが使徒たちの感覚は閑置されていた。彼らは主の多くの言葉を理解しなかった(1)、と述べたマルコの「書いた」箇所をすでにマタイは省いた、ということに注意したならば、それにしてもあらゆる典拠なしには決して存在しない en hais 「それらにおいて」は、ラッハマン [Karl Lachmann 1793-1851 ドイツの古典文献学者。マルコが一番古く、マタイとルカの資料になっている、とする今日広く承認されている仮説の最初の唱道者] が本文の中へ入れ戻したように、真の読み方であるということが、ここでも受け入れられる。それゆえ、意味はこつである。この手紙の中にも、理解困難ないくつかのものがある。このものを無知で心の定まらない者たちは、別の諸書〔聖書の別の箇所〕でもするように、曲解したり逆さまな意味に取ったり、彼ら自らの滅亡を引き寄せたりする、と「ペトロの手紙」二章一六節。——これら最初の関係の中に、次のものがすべてが予示されているので、ペトロの言葉の中に、聖書の読み方 Bibellesen が後に制限され禁止されることの始まりを見ることが出来る。これらの制限や禁止は通例次の言葉によつて導入された。Cum experientia manifestum sit, si Biblia vulgari lingua passim sine discrimine permittantur, plus inde ob hominum temeritatem detrimenti quam utilitatis oriri [もつと、聖書が民衆の言葉に至る所で隔たりなしに委ねられるならば、その時から、人間の無慮のため、利益より不利益が生じるという経験が、それゆえ、現れるであらう]。しかしながら、ペトロはこの

危うさゆえに、彼が、パウロの手紙は簡単に誤解を引き起こすきっかけを与えうる、ということに注意するのを怠りえないとしても、パウロの手紙を禁止することまでは行かない(2)。ペトロの時代以降、パウロに関するこの感情は一層明らかとなり、しかもこれに関する最も明白な証言はクレメンス「ペトロの活動を主題とする『偽クレメンス文書』の著者」の Recognitions [承認] であり、この中でパウロは確かに recto nomine [匿名] あるが、はつきりと本当に非難され、しかもペトロよりかなり下位にされている。

(1) 『マルコによる福音書』六章五二節「パンの出来事を理解できず、心が鈍くなったからである」。八章一七節「・・・パンをもっていないことで議論するのか。まだ、分らないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。」を参照。

(2) 聖書普及協会に対する教皇の一八四四年五月八日付の回勅は、実際「ペトロの手紙」二章一六節、一七節の章句を証明に用いなければならない。"Sed vos quidem minime laet, venerabiles Fratres, quorsum haec societatum biblicarum molimina pertineant. Probe enim nostis consignatum in sacris ipsis literis monitum Petri, Apostolorum Principis, qui post laudatas Pauli epistolas esse, ait, in illis quaedam difficultia intellectu, quae indocti et instabiles depravant, sicut et ceteras Scripturas ad suam ipsorum perditionem, statimque adjicit: Vos igitur fratres praesentibus custodite, ne insipientium errore traditū excludatis a propria firmitate." 「尊敬すべき兄弟たちが関わるであろう聖書教会のこの苦悩は、何のためにあなたがたに隠されていないのであるのか。なぜなら、私たちの神聖な証文である手紙そのものの中に、使徒たちの最初の者であるペトロの予言がある。ペトロは、パウロの優れた手紙の後には、それらの手紙の中に、無教養な人々や心が揺れ動く者たちが、その他の聖書をあたかも曲解するように、曲解すること、理解すること、何が困難なものがあり、このことが自分自身の破壊をしつかりと付け加える。それゆえ、愛する兄弟たち、あなたがたはこのことをあらかじめ知っているのですから、不道德な者たちにそのかされて、堅固な足場を失わないように注意しなさい。」(一八四四年の日付の補遺)。

／しかしもちろん、教会が長続きし、強固になり、歴史的な基礎と繁栄 *Fortgang* とを獲得すべきならば、ペトロが優勢でなければならなかった。ペトロにおいて身体が中心的でまとまっているものであり、パウロにおいて理想的なものが、中心を外れたもの（この言葉は欠点的な意味にとられるのではなく、私がこの講義や別の講義で用いたような、中心から離れ独立の、駆り立て動かす原理と見なされる）を圧倒する。しかし、まず身体、それから精神「霊」、これが自然の順序であり、外界へ現れ出るよう決められているものは何ものもこの順序を逃れえない。実際パウロは教会の中でつねに中心を離れたある立場のみを確保していた。というのは、彼が発言したり、あるいは彼の言葉が聞かれたり、彼のまったく人騒がせな力によって聞き取られたりすることに、例えば、何人かの敬虔で深く感じる人々が、いかなる業によっても得られない、神の自由な恩寵に関する使徒パウロの火のような言葉を特に心に受け止めたことによって「例えば、『使徒言行録』二一章二四節・・・神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。」なお近世にもローマ教会のお膝元で、ヤンセン主義「一七世紀の中頃から一八世紀初頭にかけてフランスの宗教界で激しい論争を引き起こした教派またはその神学」が生じたように、ある運動が教会の中に生じたからである。同じく、イギリスの最も風変わりな「中心を外れた」宗派であるメソジスト教徒たち「J・ウェスレーの福音主義的運動にその起源を持つ宗派の信者。キリストの贖罪と聖霊による再生に力点を置く」の生き生きとした確信は、パウロの書物の中にその主要な源泉を

持っている。

キリストは、あたかも世界が彼つまり裸の単なるキリストとの直接的な交際に耐ええないかのように、いまだに包まれ、ヴェールで覆われ、たいそう多くの異質なものやその上彼を隠すもので覆われている、ということが、この時代にしかも現在の世界状況のもとで、何故に、何のために必要であるか、を主は知るであろう。エクスタシー、痙攣、本当のオルギー的なもの、これらは、主としてアメリカにおけるメソジスト教徒たちの大きな集会や部分的にはイギリスのより小さな集会も受け入れたものであり、周知のものである。ここでは、純粋なキリストが説教され、罪の許しに関する教説が純然とあらゆる付加物なしに告げられる。この種の諸現象は、教会が、必ずしもまさに国家によってではなく、自由な考えをする者と自称するが、しかしながら自分たちの理念に適さないものすべてに対して政治的な欲望からさえも自由でないそのような人々によってすら、なおたいそう厳しく監視され、大部分はまだたいそう邪推深く観察されていた時代に、どの様にこの時代と折り合いをつけたのであろうか。／――まさに言及された現象すべては、その上、あの一つの変化、つまり、使徒たちの時代以降教会の中に生じた最大の変化、すなわち宗教改革の帰結にすぎない。宗教改革は長い間準備され、しかも中世全体を通じてすでに宗教改革のために無数の犠牲が血を流したにもかかわらず、宗教改革は、その最も深い根拠から見ても、聖ペトロの無制限な権威 *Auktorität* を凌駕したパウロの威信が最後に成功した高揚以外の何ものでもなかった。ペトロの権威に基づいた教会の外で、この教会から独立に振る舞う人がプロテスタント「抗議

する人」であるならば、使徒パウロは最初のプロテスタントであり、しかもプロテスタント主義が自らに対して提示しうる最古の文書、つまりプロテスタント主義の magna charta 「大憲章」は「ガラテヤの信徒への手紙」二章である。

ここでは、キリスト教が存在している *existence* 何かある特別な形式を一面的に優遇することが、問題ではありえない。真の教会はこれらの諸形式のどれか一つに存在しているのではなく、ペトロによって置かれた基礎からパウロを通して、聖ヨハネの教会である終わりへと向かうのが真の教会である。哲学者たちに相応しくない考察方法とは、最大の最も力強い現象の中に、つまらない無価値な偶然の出来事 Zufälligkeit のみを見出すことのできるものである。ローマ教会について、この教会が自らに与えるこの世での政治的立場を受けるかあるいは受けないかは教会の力の及ぶことであるかのように語る場合が、その種のものである。ローマ帝国の権力が打ち破られ解消した時、すでに存立していた教会は、海の満潮が目に見えない微風によって押し寄せてくるように、西方世界にあふれた諸民族に対して、空位になった不可欠な政治的権力の地位につかねばならなかった。教会がそもそも外面的な「世界的影響力を持つ」強力な組織になると、教会は自分自身だけでもキリストの言葉 私には平和ではなく、剣を送るためにやって来た を満たした「マタイによる福音書」一章三四節・・・平和ではなく、剣をもたすために来たのだ。政治的権力のあるところでは、また剣がある。しかも事実また、キリストの逮捕の際、使徒たちのうちでただ一人剣を使用した者であるペトロの剣が、教会には必要であった。この剣の性格のうちに、／後にロー

マ教皇座の敵すべてを、つまり本当の敵であれ思い違いの敵であれ、火と剣とで根絶する「エステル記」E二四節。槍と火の炎で情け容赦なく滅ぼされ・・・同一の食い尽くす精神がすでに隠されていた。特に十三世紀には、ある時にはボギミール派「一

世紀の中頃から、バルカン半島と小アジアに広められた二元論的分派。名称は創設者ボギミール（神の友の意）に由来する、ある時にはマニ教徒と名付けられた、中世のいわゆる異端たちに対して、特にまた、いわゆる *fratres liberi spiritus* 「自由神霊兄弟団」に対して、例のない方法で、暴威がふるわれた。それは、群れをなして自らの命を積み重ねられた薪の炎の中で落し、当時ドイツ皇帝、バイエルン公ルートヴィヒ [Ludwig 1287-1347] 神聖ローマ皇帝でもある。中世的権利要求をするヨハネス二世と争い破門された」のもとに逃げ場を見出したにすぎないフランシスコ修道士たちのうちのいわゆる霊的指導者たちに対してのように暴威がふるわれた。まさにこの人々こそが、当時まさに、教皇は真の反キリストであり、黙示録の怪獣「ヨハネの黙示録」一章七節・・・一匹の獣が、底なしの淵から上って来て・・・である、という意見を言い立てた者たちであった。ローマ教会にとつて非難であるものすべては、福音の物語、特にマルコの福音書が沈黙してはいないペトロの誤りの中に、予示されている。キリストがペトロの告白に、ペトロを使徒たちの長に引き立てた言葉でもって、応答したあの経過に直接、対立した種類の経過が連なる。それに続いてすぐ次のように物語られる。その時からイエスは、どうして彼がエルサレムに行かねばならないのか、しかも大司祭たちやユダヤの律法学者たちによってたいそう苦し

められ滅ばされなければならないのか、・・・を弟子たちに示し始めた。「『マタイによる福音書』一六章二一節。このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行つて、長老、司祭長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、・・・と弟子たちに打ち明け始めた。』そこでペトロはイエスをわきへ連れていき、イエスを叱責することを始め、そして言った。主よ。あなた自身を大事にしてください。そのようなことは、あなたにあつてはなりません、と。しかしキリストは振り向いて言った。敵対者（サタン）よ、去れ。お前は私にとつて躓きである。といふのは、お前は神のことではなく、人間のことを思つてゐるからだ。『同書同章二二節—二三節。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。・・・そんなことがあつてはなりません。』イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ。・・・神のことを思わず、人間のことを思つてゐる。』無敵なものと認めた、神の子キリストへの信仰において、教会の岩と名付けられたその者は、自らの処世術において躓きとなり、主によつてサタンと名付けられた。ローマ教会に対してしばしば非難をした最も不埒な処世術と、最も頑固で動かない確固とした信仰とを調和させること以上に、相応しいものはあるのであろうか。キリストの別の言葉がある。「誰かが私の後に従おうとするならば（しかもペトロはキリストの直接の後継者に決められていた）、その者は自分自身を否定する。ある者が全世界を獲得するが、しかしながら、自らの魂に傷を負つたならば、その者にとつて何が役立つであろうか。『同書同章二四節—二六節。わたしについて来たい者は・・・わたしに従いなさい。・・・たとえ全世界

312
を手に入れても、自分の命を失つたなら、何の得があるうか。・・・」。／實際全世界を獲得したその後の教会に関して、それは何という言葉であろうか。

すべての者があなたにますますくとしても、わたしはつまずかないだろう。『マタイによる福音書』二六章三三節。・・・みんながあなたにますますいても、わたしは決してつまずきません・・・。』しかも、『ヨハネ』による福音書で物語られるように、私はあなたのために私の命を捨てるでしょう。『同書一三章三七節。・・・あなたのためなら命を捨てます。』とペトロが特にうめばれた後に、ペトロが主を三度否認することが、同じく予示される。『マタイによる福音書』二六章三四節。・・・あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言つたろう。』三重の否認の中には高まりがある。最初の呼びかけにペトロが答える。私は、あなたが何を話しているか、分からない、と。『同書同章七節。・・・何のことを言っているか、わたしには分からない。』彼は説明を拒絶したにすぎない。第二の呼びかけにペトロは確かに、私はその人を知らない——現実的な否認——、と言う。『同書同章七二節。ペトロは再び、そんな人は知らない』と誓つて打ち消した。三度目の呼びかけにペトロは呪い、私はその人を知らない、と誓い始めた。『同書同章七四節。・・・ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、そんな人は知らない』と誓い始めた。すると鶏が鳴いた。ローマ教会は三重の方法で主を否認した、とローマ教会に対して非難をしよう。一度目は、ローマ教会が政治的な至上権を熱望することによって、二番目は、ローマ教会自身がこれらの「暴」力に依存し、これらを自らの道具と

第三十七講

主を繰り返して否認したにもかかわらず、ペトロは、『ヨハネ

し、彼らの血の命令を命令し、そしてこれらの命令によつて支配しようとした時、三番目は、ローマ教会が自分自身を政治的権力の道具へとおとしたことによって、『三重の方法で主を否認したから』である。しかしキリストが、キリストを三度否認したまさにその人に、私の子羊たちを飼いなさい、と三度言ったように、『ヨハネによる福音書』二一章一五節―一七節。・・・私の子羊を飼いなさい・・・』、教会では、たいそう多くの品位ある成員たちが繰り返され続いた 主の否認 に関して悲しんでいたが、教会は、キリストの教会であることを止めなかったし、しかも、決して休らわない思惟の矛盾のもとでのように、政治的な嵐のもとで、この実在的な支えなしにはずつと以前に失われてしまったであろう、あらゆる時代にとつての基礎を、守ることを止めなかった。そして主が振り返り、ペトロを見た。そしてペトロは主が彼に言った主の言葉、つまり、雄鶏が鳴く前に、あなたは私を三度否認する、という言葉を思い出した。そしてペトロは外へ行き、激しく泣いた 『マタイによる福音書』二六章七五節。ペトロは、『鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言つたろう』と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外へ出て、激しく泣いた。』と言われているペトロのように、教会が主のまなざしに、主の予告を思い出したとしても、おそらくその瞬間はあまり遠いものではない。

による福音書』の最終章で描かれているあの談話において、キリストによつて彼の直接の後継者と指定する旨明示された。ここでキリストはペトロに、*Sy acolouthi moi* 「あなたは私の後についてきなさい」、と言つ『同書』二一章二節。・・・あなたは、わたしに従いなさい。』。ここでは私は あなたは私に従いなさい という言葉を、たとえペトロがまたキリストに十字架上の死において従つたとしても、単にペトロの将来のこの死からだけではなく、この最後のあくまでも預言的な場面の全精神によつて、普遍的な意味で理解しなければならない、と思う。しかしすでに三度繰り返された「私の子羊たちを飼いなさい」は、単に信仰者たちの引率者にペトロを指定する旨明示するばかりでなく、他の弟子たちも居合わせているのだから、他の使徒たちの引率者としても明示する『同書』二一章一五節。それゆえ、これは、その上特徴づけられるように、権威 *Auktorität* のない単なる *protostasia* 「聖職者としての指導者」ではなく、本来の *protostasia* 「聖職者としての指導者」、つまり、ペトロに授けられた権威をもつた長である。これは、主のお気に入りとしてではなく（というのは、ペトロはそうでなかったからである）、ペトロの性格が彼をして、特にそのために役立たせたがゆえに、「権威をもった長」である。なぜならば、あらゆる仕事のうちで最も困難な召喚は、創立し基礎を置くことの召喚であるからである。

キリストの明瞭な意図は、あらゆる権威がペトロにあり、ペトロから出てくる、ということである。ところが、このことと、使徒の職を直接主から受け取り、したがって、ペトロから独立なものと説明される、パウロの異常な召命とは矛盾している。ノパウ

口がペトロへのあらゆる依存に用心する明らかな底意は、パウロがペトロから自由な原理、つまりペトロから独立な權威である、とパウロが意識している、ということをはつきりと示している。それにもかかわらず、このことが妨げないのは、教会が歴史的根拠を理解したのに応じたその割合において、教会がますますペトロの独占的な權威に引きこもった、ということである。あるものが展開すべきならば、そのものの土台Fundamentはとりわけ維持されなければならない。パウロの教会はむしろ隠れている教会であつて、しかも目に見える教会の中に含まれることを決して止めなかつたし、長い間そのものとして現れつることなしに、目に見える教会のうちに間断なく保持されていたにもかかわらず、權威はこの消極的な奉仕に尽力したし、なお今もキリスト教に対して尽力している。確かに、たとえ結果を伴わないとしても、中世のあいだ中、パウロの原理はつねにしかも特に強力に活動していたというの、は、実在の原理が厳しくとじこもればこもるほど、この原理は理想的原理をますますはつきりと閉め出さねばならなかつたからである。したがって、真の關係を認識した者がずっと以前に予見しただらうことは、この原理が突然に現れ、ペトロの教会に対する自由な対立を引き起こし、自らを独自の歴史的原理、つまり第二の新しい時代の原理に制定するであらう時代が迫っている、ということである。

より高次で神的なものを何も歴史の中に認識しない人々は、宗教改革のような出来事すら最も価値のない諸原因から導き出すかもしれない。例えば、張り合っている托鉢修道会「財産を持たず、他人の好意の施しを乞つて生きることを掟とする教団」の汚らし

い私欲からとしておこう。しかし彼らが考慮するかもしれないことは、このような説明方法がここでは不公平ではなく適用されるが、あそこでは適用されえない、ということである。このような諸原因を探ることがひとたび問題になるならば、まさにたいそう純粹に偶然的で恥すべき誘惑が見出されえない事柄はほとんど存在しないであらう。けれども、このような偶然によって人間の諸事物が支配されるのではなく、キリスト教を最初に基礎付け拡張するに際してさえ、閉め出されえない道具的な諸原因あるいは付随的な諸原因が何であれ、現実的な諸原因はこのようなものうちではなく、神の意志があらゆる展開に命じたより高次な諸法則の中にある。

315

／世界の中に現れ、世界のためにしかも世界において実現するものすべては、前提を必要とする、つまり、真なるものではなく、本来存在すべきものではない始まりを必要とする。ところがすべてのものが、そうであるとすぐには認識されない。しっかりと根を張るために、この始まりは自分自身のために存在するものと見なされなければならない。それゆえ、すべてのものは、再びその前提から自由に展開するために、より高次のポテンツを必要とする。単に基礎であるものが、この方法で偽りの地位を獲得するならば、それどころか、高次の要求とは反対に、anticeimenon「反対するもの」、敵対するものとして現象するならば、このことは基礎としてのこのものの性質を、つまり、根、基礎そして始まりであるこのものの権利を破壊することができない、それどころかまさに、前進する認識は、このものがその地位にとどまり、そうすることで展開において、つねに同時に、いずれの

場合にも異議を申し立てられうる何か固定したもののままであることを欲しているに違いない。宗教改革の時代に先行していたのは、長や成員たちが持つ全キリスト教徒を改良することへの一般的な渴望や嘆息である。ところが、教会の諸状態がそれ以前の時代のあらゆる闘争によってたいそう紛糾し、教会が自分自身でこの決着を完成しえなかったため、決裂が生じなければならなかった。しかも、教会が自らの内に保持することも、かくまうことも、収容することもできなかった原理は、教会を土台としても廃棄することなく（ルター博士はローマ教会そのものをまだ自分の愛する母と名付けている）、教会を例外的ない退化への道で引きとめ、しかも教会そのものを助けて将来高次の変容をつまり究極的な解放を得させるために、教会から独立に自分だけで現れねばならなかった。

316

ペトロの教会は厳格に律法的なものである。厳格な律法でもつてすべてが始まる。しかし、独占的になったペトロ的なものから自由で独立である教会が、ペトロから独立で自由な使徒の召命によって、すでに予見されていた。あまりにも偏狭になった教会に対する新しい共同体が受け入れざるをえなくなつた。独立性は、それゆえに、真の教会からの分離ではなかった。真の教会は、これらの対立によつては廃棄されないし、むしろ、ただ高次の意味において定立される。あらかじめ教会といふものの *exochen* 「優れた意味で」名付けられたものは、新しい共同体としてノそれ自身で真の教会ではなく、双方が生じてくるはずの唯一真なる教会を媒介する成員である。先位 *Protia* のみがつねにペトロの教会に残る。それどころか、先位はまさにその独占性そのもの

において他の教会の必然的前提である。

独占的原理から独立の自由な教会は、ドイツにおいて生じるべきであつたし、特にゲルマン諸国民の間で広がるべきであつた。というのは、ロマン人系の諸国民がキリスト教に対する関係は、明らかに著しく別の関係である。これら諸国民において、キリスト教はほとんどまったく、彼らの外からただ来たものとして現象するが、ドイツ人のもとでは、キリスト教が生来のものであるように思える。ドイツは、黙示録の女がのがれ逃げ込んだ荒野である。この女がひどい陣痛を伴つて産んだ子を竜である敵対者が待ち伏せる⁽¹⁾。教権制度そのものの土地では、キリスト教の代わりに、まったく別のものが、近代の神話が、何と座を占めていることであろう。ナポリ人にとつて、すでにバドヴァ人にとつて、キリストはあまりにもかけ離れているし、彼の精神は過去へ引き返す努力をしているところではない。聖アントニウス [Antonius (Padova) 1195-1231 イタリアのフランシスコ修道会の有名な説教師。聖人。一五世紀以降アントニウスの崇拜が大衆に広まり、紛失物の発見、熱病、疫病除けなどのために特別な保護を願う習慣がおこつた] がずっと身近な目下の慰めである。

(1) 『ヨハネの黙示録』二二章「四節—五節。……竜は子を産もうとしてゐる女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。……女は荒野へ逃げ込んだ。……」

ギリシア教会はローマ教会に対置させられない。というのは、イスラム教の流れがギリシア教会を圧倒し、しかも、たとえ、結果において同時にローマ教会から守るとしても、ギリシア教会にさらなる前進を阻んだので、ギリシア教会が形成することすら

できなかったし、しかもギリシア教会がローマ教会の不当な普遍性（カトリック教義に一致すること）に対する生き生きとした反対として保持した同一の要求をギリシア教会はするからである。それは、ギリシア教父たちがすでに以前、あなたはペトロである云々「『マタイによる福音書』一六章一八節・・・あなたはペトロ・・・」という言葉の人格的解釈を、たとえ理由なしにであれ、避けようと努力したようにである。ギリシア人たちは、キリストが彼の教会を建てようとした岩ということで、ペトロの人格ではなく、ペトロの告白とのみ理解されうる、と主張した。特にオリゲネス [Origenes, 185頃-254頃 ギリシア教父。アレクサンドリア学派の代表的神学者] とクリュソストモス [Iohannes Chrysostomus, 347頃-407頃 コンスタンティノポリス主教。四世紀の代表的教父。聖書解釈学者。聖人] がそう主張した。とりわけオリゲネスは「あなたがあの人ひとり（ペトロ）の上に神の全教会を建てたと思うならば、あなたは雷の子ヨハネや他のあらゆる使徒たちについて何を言うのであろうか。あるいは私たちがあえて主張するだろうことは、地獄の門が特にノペトロに對してのみ何もできないが、しかし他の者たちに對して何かをすることができ、しかも彼らを圧倒しうる、ということであるうか」(1)。「この言葉の人格的意味を承認する私たちの見方に対して、この論証は明らかに何も証明しえない。というのは、ペトロについても人格的に理解されたとしても、それらの言葉の中には、ヨハネとパウロとを閉め出すという意図はないからである。——私たちは、これらの言葉の中でペトロに授けられた機能とは別の機能をこれらの言葉に与えるにすぎない。ペトロは、これらの言葉

によれば、まさに基礎にすぎないし、しかもまたまさしく教会の基礎、すなわちキリスト教が初めてひとりて存在 *existenz* したこの特別であるが制限された形式の基礎であるにすぎなかった。しかし、残りの使徒たちに関して、もちろん注目すべきは、すでに述べたように、私が確かに使徒時代の非常に古い文書と見なしたユダの短い手紙を除いて（もしユダを使徒たちと見なそうとするならば）、「——」つまり、この唯一極めて貴重な書物は、しかしながら相対的には重要ではないが、特に「その」主要な諸思想は「ペトロの手紙二」にも現れている——、それゆえ、ユダの手紙同様に、使徒のヤコブではなく、おそらくエルサレムの共同体の長である主の兄弟のヤコブであり、明らかにパウロの手紙によつて自ら書くようにさせられているヤコブの手紙を除くと、すなわち、これらの手紙のほかに、他の使徒たちのいかなる人にも何か教訓的書物は現存していない、ということである。私たちはただ三人の偉大な使徒ペトロ、パウロそしてヨハネの教訓的書物をもっているにすぎない。これら三人のこの事情によつてすでに暗示されていることは、彼らの作用が最後の時まで、つまりキリスト教の最高の展開にさえ及ぶべきである、ということである。その上、ペトロにはただ二つの短い手紙が現存しているにすぎないし、明らかにパウロがこの手紙を書くきっかけを与えている。それゆえ、パウロは書物によつても同時代の人たちに作用しようと考えたが、しかしこのことによつて、間接的に、教会の未来つまり教会の後の時代に対する自らの使命を証明した最初の人であつたように思われる。

(1)『マタイ福音書注解』一六章。

ここは、私たちの今までの展開すべてに対してなしうる非難に触れることが、適切な場所であるように私には思える。私たちは、かつて新約聖書に算入され、/教会の權威を賦与され、それゆゑ、教会法に適っていると呼ばれる書物すべてを、すなわち、私たちはこれらの書物すべてを区別することなしに、あるいはたとえ人が区別しようとしても、批判なしに使用した、という非難を私は想像する。ところが、多くの書物の真正性あるいは使徒による教えの起源はすでに以前から疑わしかったであろう。例えば、『ペトロの手紙二』の起源は疑わしかったであろうし、批判はますます広がり、かつて与えられた諸例にしたがつて、本来的にいかなる新約聖書の諸書も、もはや完全には信頼されないであろう。これに対して私は今、手短に次のことだけを注意しよう。

1) 私たちが新約聖書諸書の諸々の意見を私たちの展開に利用した時、まずもって、これら諸書は私たちからただ原典とのみ見なされたし、キリスト教的精神が吹き込まれていることが認識されるそれら諸書の著者たちはキリスト教の精神によって満たされていた。この際、著作者への問いはまったく二次的なものである。私たちが諸書を利用した純粹に歴史的な目的は、著者が実際に疑わしく、しかも伝統がそれらの著者にした者たちとおそらくまったく別な者たちである時にも達成される。著者に関するこの確定は、あの教義上の取り扱いに対してのみ重要性を持つにすぎないが、この取り扱いがキリスト教教説の主要命題を教説そのものために、真と見なすのではなく、この取り扱いにとってこれらの命題が単に真であるにすぎない。なぜならば、これらの命題は、神によって吹き込まれた使徒伝来のものと見なされる諸書

の中にあるがゆゑに、またある限り、真だからである。私たちは新約聖書の諸書の靈感に關して決して問われないし、少なくとも決してはっきりとは触れない。というのは、この教説あるいはあの教説があつた諸書に現れるがゆゑに、私たちは教説を真と見なすのではなく、反対に、私たちが教説を真と認めるがゆゑに、つまり、キリスト教がそこからのみ把握されうるあの偉大な関連において必然的と認めるがゆゑに、私たちはあの諸書を真正であり、キリスト教の精神によって鼓吹されていると見なし、しかもこの意味でのみ、私たちはこれらの諸書を証拠として引き合いに出すからである。

ところが、まさにそれゆゑに、しかも2) 本来外面的な確証ではなく、所与の書物の内容がその書物をキリスト教の、特に使徒伝来の書物にするがゆゑに、今まで真正と見なされていた何かある書物の真正性を疑う人々は、/このような書物の内容を真に理解していることが彼らに現れている、ということをまず示さなければならぬ。それゆゑ、新約聖書の真の批判には、單なる外面的な学識や、歴史的関連を無視した可能性を安易に弄ぶこと以上の何かが必要である。というのは、例えば、すべての人がたいそう独特で決定的な印象を持っているパウロの手紙のうちの一つを使徒パウロに対して宣言して剥奪しうるためには、少なくとも別の著者である歴史的可能性が立証されなければならないからである。例えば、パウロ的と見なされているエフェソの人々あるいはフィリピの人々への手紙のような手紙を書きえたであろう使徒「時代」以後のある人物は、不思議と完全に知られないままでありえたまったく異常で驚くべき人物であつたに違いない、と私に

は思われる。しかも、使徒伝来の諸書と使徒「時代」以後の最初の諸書との間の、あの以前言及した隔たりは「本書三六講二九六頁」、使徒伝来の諸書の真正性に対する最大の証明であると私には思える。しかしまた、使徒の時代のある人物を著者と考えるようにしても、例えば、パウロと精神的に同類のアポロに、あるいはバルナバに帰せられた『ヘブライ人への手紙』において生じたように、使徒たちと関係があつたであろうそのような人々を著者と考えるようにしても、このことは私たちの観点にとつてはまったくいかなる違いをも作らないであろう。それゆえ、私たちがこの展開において批判あるいは批判的問いにほとんどわずかにしか取り組まないでも、正しい批判に真の支えと確実な基礎付けを与えうるあの理解がこれらのことで初めて基礎づけられた、と私は思ったが、私は最後に、

3) なお注意したいことは、あの賞賛された批判の前では、ほとんどいかなる新約聖書の諸書もはや確実なものであるはずがない、というあの批判は、人が言うほど危険なように見えない、ということである。例えば、この批評家あるいはあの批評家にあえて私が問うことは、彼が語る書物について、一時しのぎや文献学的や文法的にではなく、その意味「真意」にしたがつて、理解したのかどうかである。例えば、彼が『フィリピの信徒への手紙』を理解したかどうかを、私は彼に問う。私たちにたいそう偉大な光を与えた主要箇所を彼がおそらくまったく理解しなかったことを、むしろ私は非常に疑ふ。そうでなければ、彼はこの意味で『ヘブライ人への手紙』を理解したのだろうか。一般的である浅薄な解釈において、たいていあらゆる人は、自分がまさに理解す

320

るものを聖書の一部に見出すので、その人は、パウロ以外のいかなる著作者のことも考えるのを許さない特殊パウロ的な理念を、『ヘブライ人への手紙』の中にまったく見出さなかったか、あるいは発見しなかったか、と私は言いたいと思う。—— 私たちに見守られて進行するが、その真の諸原因が人々に知られていない諸経過について、人々は彼らの推測でもってどの様に思い違えるかがさらに理解される。最大の思い違いが完全に避けられないこのような隔たりにおいて、推測を何と考えるか、とりわけ何か組み合わせる才能が編集的な才能と混同される時、このたいそう賢明に行う批判全体を何と考えるか、がさらに理解される。

この脱線の後で、私は先の注意に戻る。三人の偉大な使徒たちのみに手紙の原典、つまり教訓的な諸書が疑いなく現存しているが、これらが示すのは、これら三人の使命が同時に未来に向かつていて、彼らの時代に制限されていなかったこと、彼らの作用がその上キリスト教の最終的展開に及んでいるはずであつたことである。

ドイツでのキリスト教の運命は決定されるであろう。ドイツ民族は最も普遍的な *universeller* 民族として承認されている。長い間、ドイツ民族は、あらゆるものの真理に対して自らの政治的意義すら犠牲にした最も真理を愛する民族と見なされていた。ドイツ国内には、古い教会と新しい宗派とが、同じ政治的権利を持つてお互い並存している *existent*。後の変革 *Veränderung* はドイツ全体においてばかりでなく、ドイツのあらゆる個々の部分においても、完全に等しい権利をもつて、古い教会を並置した。このことは理由なしに生じたのではなく、それ自身において新しい高次の展開

の前兆である。他の方法では注意を引きえないために、ある部分は絶望から、三百年以前に決定されなければならなかった争いを今再び、しかも、最も貧弱な武器で始めようとする僅かな人々の無力な悲鳴は、何も解消しないであろう。心術が非ドイツ的であることや歴史的な見方のこのような浅薄さにおいて、不和の種を蒔くことが最も悪しき意志に対してさえ、しばらくの間おそらく成功するであろうが、しかしながら、決して本来の目的を達成することには成功しないであろう。／私は非ドイツ的な心術について話をする。というのは、あの偉大な宗教的変革は、まさに本来ドイツ的な精神と心情の本質から生じたからである。どんな手段によつてのみ、この変革がドイツの大部分において未然に防がれたか、を誰も秘密にしない。私はここで、プロテスタント主義の弁護者たちを作るきっかけを与えない。私の観点はそもそもキリスト教の歴史的展開全体を視野に入れたキリスト教であり、私の目標は、精神のうちにのみ建てられうる、まずもつてあの真に普遍的な教会、であるし、しかもキリスト教を完全に理解することのうちに、つまり、一般的な学問や認識とキリスト教が現実的に融合することのうちに本質が存在しうる、まずもつてあの真に普遍的な教会、である（教会がここでもなお適切な言葉であるならば）。キリストが秘密である限り——教会の個々の成員に対してばかりでなく、教会そのものにとつても、秘密である限り、つまり、教会が、誰も鍵をもっていない、鍵がかけられた聖骨入れ、の中でのように、キリストを単に遠くから示すことに、教会の全課題を置く限り——、長い間、プロテスタント主義はその真の成果を収めなかった。起源に遡るならば、すでに

ecclesia「集まり」という言葉のうちに、何か制限するものがある。ecclesia「集まり」は *eccaloumenon*「呼び出された者たちの」共同体、世界から呼び出された者たちの共同体である。このことでもつて、ecclesia「集まり」は自分自身に対して、しかも自分の外にまさに世界を持つ。そういうわけで、キリスト教が教会としてのみ持つその面からプロテスタント主義に対してこの名前が疑つてかかられる時、プロテスタント主義は少なくとも反対しない。使徒という名前が疑つてかかられるパウロが自らについて語ること、神の恩寵により、私は私であるものであり、しかも私への神の恩寵は無駄なものではなかったが、私は彼らすべてより一層多く働いた（「コリントの信徒への手紙一」一五章一節。「神の恵みによつて今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。・・・」）をプロテスタント主義は自分に当てはめる。プロテスタント主義が、これはそもそも、最初のポテンツの独占的存在を克服する、媒介するポテンツの作用であるが、しかし媒介するポテンツはまさにこのことによつて極めて積極的に作用するので、このポテンツは最初の盲目的で動かない存在の代わりに、自由で自らを意識した生をもたらし、と答えることによつて、プロテスタント主義は、それが破壊の原理である、と同じように非難されうる。プロテスタント主義は、自分が単に移行、媒介であること、つまり自分が媒介しなければならぬより高次なものととの関係において、自分が何ものであるにすぎない、ということを確認すべきである。しかし、まさにそれゆえに、／プロテスタント主義のみが未来をもつが、この未

来は硬直したペトロの教会に対して断たれている。この教会自身は、結局プロテスタント主義の助けによってのみこの未来へ到達しうる。反対にプロテスタント主義を再び屈服すること、という希望が現れるとしても、その希望はますます愚かしいものである（1）。歴史は抵抗しがたい権威である。今や多くの者が多くを承知している有名なシラーの言葉「世界史は世界の審判である」

[Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759-1805 ドイツの劇作家、詩人。同文は『諦念—空想詩—Resignation—eine Phantastie—

九五行にある』を特に同じ意味ではまさに繰り返したくないが、歴史の判断は神の判断である。という意味で繰り返したい。歴史を解消することは、激しい流れをその源泉へ押し戻すこと、あるいは空の鳥がその樹頭に巣くっている樹木をその全くの芽に引き戻すことと同様に、不可能である『マタイによる福音書』一三章三節参照。・・・空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木・・・』。

（1）教皇（グレゴリウス七世 [Gregorius 1020/1025-1085 ローマ教皇、聖人。前名はヒルデブランド。教皇権の皇帝権への優位を策定]）が、将来決して再び聖職者の立場は世間的な者「俗人」によって損なわれない、ということを決めたことによって、教皇が聖職的なものを世間的なものからまったく解放した。この解放によって、教皇は本来世間的なものを聖職的なものから（世間的なものは以前から聖職的なものによって満たされていたし、それ自身聖職的なものであった）独立させ分離した。世間的なものはもはや自分自身の中で聖職的なものによって結びつけられていなかった。なぜならば、内面的に——聖職的に——聖職的なものによって結びつけられる代わりに、今では僅かに外面的に「結びつけられ」、外面的な関係が生じそれと共に戦いが生じたからである。母のようなキリスト教の若い感情は失せてしまったし、どんな教皇もこの感情を再び覚醒することはできなかった。（一八三五年の日付）

カトリック主義に承認されなければならないことは、カトリック

323

ク主義は事実、Sacheを持つていたし、今もなお持つていて、ということである。カトリック主義の功績は、キリストとの歴史的連関を保持したという事実である。別の面から言わねばならないことは、ローマ教会が事実を持つていたが、この事実の理解を持つていなかった、ということである。ローマ教会が持つていた統一の中で、ローマ教会はキリスト教世界の一部分を保持したが、その統一は外面的で盲目的なものにすぎず、内面的で理解されしかも把握されたものではなかった。このことはローマ教会に対するいかなる非難でもない。というのは、つねに外面的なものが内面的なものに先行するからである。ところが、ローマ教会が自らの対立を見出すならば、対立の意義は、統一そのものを廃棄することにあるのではなく、盲目的統一を廃棄することにあるのみある。それゆえまた、その意図は、盲目的で単に実的な統一から、理解され把握された統一しかもそれゆえまさに自由な統一への移行を媒介することでのみありうる。この方向性においてキリスト教に關する目標が達成されるならば、ノキリスト教は、当然自己自身の中で偶然的認識ではなく必然的認識の性格を持たねばならなかった、かつて永遠に獲得した認識を信頼して、ペトロの教会のキリスト教が保持される究極的諸形式を安心して放棄しうるであろう。つまり、キリスト教は、自らがこの中間状態においても自らに巡らさねばならなかった諸々の制限を取り去りうるであろう。その時、宗教改革が初めて完成するだろう。カトリック主義は宗教改革に対してもはやその一貫性のなさを非難しえないであろうし、プロテスタント主義に対してもはや、プロテスタント主義が自然主義、合理主義等々に人間の考えのみを対立させることがで

きる、と叱責しえないであろう。ペトロ的教会がただ拒絶し抑圧しえたにすぎないものすべてを、カトリック主義は公的な戦いの中で打倒したのだらうし、しかもその敵対者のお気に入りの言葉 ou Catholicisme ou déisme 「カトリシズムか理神論か」(周知のように理神論は無神論に等しいと見なされる)にすら答ええなくてはならない。それどころか、無神論も、つまりこの極端なものも——このものは阻止されなかったが、まさに自由な精神が、不定の宗教一般へではなく、その全規定性におけるキリスト教への帰路をこの極端なものから見出し、その結果、人類がまさにこれ(キリスト教)の中に自らの最高の学問を今後は同時に所有するので、真に、つまり内面的に普遍的なもの、それゆえ、真にカトリック的なものが今や初めて、まさに宗教改革というものの結果と獲得物である。その宗教改革について、それがカトリック的なものを破壊した、とあなたがたは語る(「」)。

(一) タランベールはプロテスタント教徒たちの神学について次のように意見を述べる (Oeuvres T. I, Notes sur l'élogo de Bossuet pag.302 「作品集第七巻」ボシュエの称賛についての注釈、三—頁) [Jacques-Bénigne Bossuet, 1627-1704 フランスのルイ十四世時代の代表的カトリック神学者]° En plaignant, comme nous le devons, les théologiens protestants de se tromper dans le principe fondamental de leur croyance, lorsqu'ils rejettent tout autorité en matière de foi, ayons du moins assez bonne opinion de leur logique, pour être persuadés, qu'ils pousseront enfin les conséquences de ce principe jusqu'où elles peuvent s'étendre, et que le Socinianisme, dont la plupart d'entre eux font aujourd'hui profession, ouverte ou cachée, dégènera tôt ou tard en un déisme franc et sans alliage. 「プロテスタント神学者が教義に関していかなる権威をも拒絶する時、彼らは自分たちの信仰の基本原理を見誤っているのだ」とボシュエの例に倣って嘆きこすれ、少なくとも彼らの論理については大いに期待して眺めてみようではないか。というのも、私たちが確信するところによると、彼らはこの原理の帰結をそれが行き着

324

くところまでついには推し進めていってしまうであろうし、そして、公然とあれ、密かにあれ、彼らの大部分が今日表明しているソツィニ主義「宗教改革以後、イタリア、フランス、ドイツなどにおこった反三位一体的神学による教会運動に与えられた総称」は、遅かれ早かれ、まったく純粋な理神論へ凋落していくからうからだ。(前で「三—頁」でタランベールはプロテスタント教徒たちに対するボシュエの「l'argument le plus victorieux」[「最も喝采を博した論拠」]として次のものを引用した。 Nous datons, leur disait l'évêque de Meaux, du temps des apôtres, sans interruption et jusqu'à nos jours; vous êtes de nouveaux venus, arrivés d'hier et sans mission; /ou résumez-vous tout-à-fait à nous, ou séparez-vous-en tout-à-fait, et cessez absolument d'être chrétiens, si vous ne voulez vous résoudre à être tout franchement et tous uniment catholique. 「モーの司教が彼らに語っていたのは、こいつのことである。私たちの時代は、今日に到るまで途切れることなく、使徒たちの時代から続いている。あなたがたは、伝道も持たず、昨日やって来たばかりの新参者たちである。／あなたがたが私たちのところに留まるにせよ、あるいは、私たちのものを去るにせよ、あなたがたが全員でカトリック教徒たらんと決意しないならば、キリスト教徒であることをきづきつづいて止めまいなさい。彼らはこのことを行った。彼らはこの忠告を守った。しかし、彼ら(プロテスタント教徒たち)が純粋な理神論のもとに到達したが、この理神論から、この観点がなお残しているのとは別の方策でもって、積極的「実際の」キリスト教の認識へ、それもその全内容においてその認識へと到達したあとで、理神論を当然邪魔にしたが、邪魔にしえなかつたあの権威、は余分なものになった、ということとは明らかである。しかも有名な二者択一命題 ou Catholicisme ou déisme 「カトリシズムか理神論か」は、かなり真理である。』いかなる目に見える権威にも従わなければならない。[「純粋理神論」]の観点にまで必然的に進んでいかなければならない。しかし、このことから帰結しないのは、この者がまさにこの観点からはキリスト教の観点へと戻らないで、しかもあの権威からまったく独立の、キリスト教の観点到立ちうる、ということである。それゆえ、カトリックの原理を弁護する者は、この哲学に異論を唱える最大の原因を持つてあらう。しかも私が、カトリック主義への傾向を持った自らの宗旨仲間たちから、もしも彼らがこのことを原理からではなく、単に本質的な内容から理解するならば、彼らがどこにおいて誤っていないかつたのか、とどがめられている一方、これに対して、カトリック主義者たちが信じるだらうことは、啓蒙されようとするあのあらゆる大ほら吹きによってより、私によって、カトリックの原理に一層亀裂

が生じる、ということである。しかし私はカトリック主義に対し憎しみなしに、公正さと価値を認めることで対処するので、私が希望することは、私に聞かせてまことにこのことを彼らからも期待してよいだろう、ということである(2)。

(2) シュテフェンス [Henrik Steffens 1773-1845 ノルウェー出身のデンマークとドイツで活躍したルター派哲学者]への序文「息子編集版全集 一 卷三九三頁―四一八頁」での著者の表明と上述のものとを比較せよ。編纂者。

ノペトロの権威にもとづけられた教会はただ外面的にのみ統一した。パウロにおいて、ある原理が準備され、この原理により、教会が統一からではなく、盲目的統一からのみ解放された。この原理が宗教改革において現れ出た。それにもかかわらず、宗教改革は第三の時期への媒介であり移行にすぎなかった。第三の時期において、統一は、自由と共存し確信を持つて欲せられた統一、それゆえ初めて、永遠に持続する統一として回復される。あらゆる外面的な強制なしに存続するこの最終的統一は、偉大な使徒たちのうちの第三の人である聖ヨハネによってあらかじめ暗示されていた第三の時期に属する。聖ヨハネと彼の関係について、私は二、三注意をしなければならない。

三人の使徒たちをお互い比較すると、ノ私がすでに以前名指しして言った預言者「エリア」のあの顔が思い出されるかもしれない「本書第一四講三 五頁」。そこでは、主は預言者の前を通り過ぎ、そして最初に暴風がやって来、岩と山が壊れ、それから地震と火が、最後に静かで穏やかなざわめきが来たが、このざわめきの中に主がいた「列王記上 一九章一一節―一二節」……主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起こり、山を裂き、岩を砕いた。……風の後に地震が起こった。……

地震の後に火がおこった。……火の後に、静かにささやく声が聞こえた」。ヨハネは、つねに始める者の本性「自然」である、ペトロの激しく突き進むものを持つていないし、またパウロの震撼させるものを持つていない。パウロの手紙は、関連した諸概念の全領域を同時に震撼させ恐れさせる、天才のあの雷鳴によって特徴づけられる。ヨハネの中には、穏やかな天の精神が脈打っている。ヨハネはキリストによって雷の子と名付けられている。このような者としておそらくヨハネは、ずっと以前に、『黙示録』を書いた。人は『黙示録』で諸関係の新しいさや、キリスト教にとつてなおどれだけ未来があるか、とに触れる。福音書や諸々の手紙の中でヨハネは、死んだ霊のように私たちに語りかける。すでに変容しキリストに受け入れられた者である。ここでもなお雷が聞き取れ、空の上でごろごろ鳴っているが、雷が地上に落ちてくることはない。ヨハネはペトロの素朴さを持ち、しかもこの素朴さをパウロの弁証法的な鋭さと結びつける。最初の三つの福音書とヨハネの福音書との間には、ときおり、ルカのパウロ的な福音書がヨハネ的なものに歩み寄っているとしても、極めて目を引く対照が常にある。両者の物語が等しく真でありうる、ということとは不可能であると思われた。最近では、ソクラテスで当然と思われる類似のことが思い起こされる。というのは、クセノフォン

[Xenophon BC 430頃-354頃 ギリシアの軍人、歴史家]とプラトンとが描くソクラテスと同様に、福音書著者マルコのキリストとヨハネにおけるキリストとがほとんど異なりえないからである。本質的なものにおいて確かに等しく真であるこれらの叙述の大きな違いから、クセノフォンの叙述とプラトンの叙述との間の

隔たり全体をふさぐほど十分に、ソクラテスが偉大であった、ということ以上の何も出てこない。真の偉大さは、自分の高みを損なうことなしに、最も深い観点まで下りていくことができる、という貶下にその本質がある。ソクラテスのこの貶下に私たちはクセノフオンの『ソクラテスの思い出』の中で気づくが、この貶下の秘密は、ソクラテスの最も思弁的で最高の諸概念が持つ一般的な道徳的意義の中にある。しかもこの意義は、アルキビアデスがソクラテスについて褒め称えるもの、つまりソクラテスの弟子たちの誰も、同時に道徳的により善く高められたと感じることなく、誰もソクラテスのもたらが去らなかつた、という結果にあつた『プラトン著『饗宴』215e-216a参照』。道徳的なもののみが最高のものにまで届き、最深のものまで下りていく。

『ヨハネによる福音書』の中にまつたく別の精神が脈打っている、ということとは否定されえない。すでに古代においても、*pneumatikon tón Euangelion* 「諸々の福音の、霊を授けられた者」と言われている「エウセビオス『教会史』六卷一四章七節。秦剛平訳『教会史』2。山本書店刊。一七四頁にクレメンスの証言として次のような引用がある。『……ヨアンエースは、……弟子たちに勧められ、そして霊につき動かされたとき、霊的な福音書を書いた。』その上、三人の福音書著者マルコ、ルカ、ヨハネは不思議と三人の偉大な使徒たちに相応する。『マルコによる福音書』は最古の伝統をペトロへ特別に關係させる。この福音書は、私の確信によれば、最も古いものであり、明らかにマタイはマルコの表現と物語とを改良し、より多く説明するが、まさにそのことによって、マルコの独創性を消し去る人物である。ルカの

パウロ的な福音書はすでに移行を形作り、『ヨハネによる福音書』は明らかに最初の時代を超えて、さらなる未来に向けて書かれている。一人の使徒のこの福音書に対して使徒的なものをおそらく対比するために、意図的で技巧的な構成がマタイという名前のもとで生じた。両者の間の特徴は少なくとも、ラテン語写本の中では、マタイの後にヨハネが続き、次によろしく、マルコとルカが続く、ということによって表現されている。パウロとヨハネとがキリスト論に関していかに親密な関係にあるか、はずっと以前から気づかれていた。普通考えられているように、一致は、二人によつてキリストに帰せられた神の尊厳（神の尊厳は至る所で等しく承認されている）の中ではなく、むしろ、両者がキリストのあの中間状態をたいそう厳格に知っていたことの中にある。この状態のみがキリストの人格を説明する。——私が使徒ヨハネについて一般的に注意しなければならぬと思うことは、これくらいである。しかし、私たちは、ヨハネを他の二人の使徒に対してあらかじめ定めた特別な立場を今なお証明しなければならぬ。

327

神そのものの中に三つの区別があるように、キリスト教の中に三人の主だつた使徒が現れる。神が単に一つの人格の中に存在しないように、教会も使徒たちの内の一人の中にのみ存在するのではない。ペトロはむしろ父である使徒である。ペトロは過去を最も深く見据えている。パウロは子である本来的使徒であり、ヨハネはノ聖霊である使徒である。——ヨハネ一人が自分の福音書の中に、マルコのペトロ的福音書もパウロ的福音書も知らない言葉をつまみ、子が父から送るであろう霊についての栄光ある言葉を持っている、言い換えれば、父から出て、しかも初めて

あらゆる真理、すなわちまっただけ完全な真理へと導くであろう真理の霊を持つている「ヨハネによる福音書」一六章一三節。・・・真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。・・・」すでに言及された決定によれば「本巻第三六講三七頁」、エルサレムの集会でユダヤ教徒たちと異教徒たちとが

ペトロとパウロとの間で分けられた時、エフェソスですでに存続している共同体の司教として私たちがもちろん知っているが、使徒としての本来的作用について私たちがほとんど、あるいは何も知らないヨハネは、異教徒たちやユダヤ教徒たちからなる完全の一つになったあの教会の使徒である、と判断されていたように思われる。しかし、この教会は本来的に依然として未来のものである。というのは、まだ目下のところ、二つの要素が区別されうるからである。これについては一つの証明「で十分である」。キリスト教徒になった異教徒たちは当然のことながら自らの業を主張しえなかった。彼らは業なしに、*chōris ergon*「業なしに」、単なる恩寵から至福になった「ローマの信徒への手紙」三章一八節。・・・律法の行いによるのではなく、・・・」。まさにそれゆえに、同じく、使徒もこのことを異教徒たちに熱心に繰り返して厳命したのである。ユダヤ教徒たちは少なくとも、神によって与えられた律法を厳格に遵守することを主張しえた。したがって、彼らは、業に依存しない自由な恩寵を受け入れがたかった。前者の意見はパウロの手紙において述べられ、後者の意見は、どんな偏見のない者も正反対の意図なしに書いたとは考ええないヤコブの手紙において「ヤコブの手紙」二章二六節。魂のない肉体が死んだものであるように、行いを伴わない信仰は死んだものです。」

328

示されているが（まさにこのことも新約聖書において注目に値することであり、新約聖書そのものの中にすでに、後の分岐すべてが現れている）、それらのような二つの意見において——宗教改革の際、再び互いに対立し、今なおお互いに並んで存続しているような、これら二つの見方において「——」、前者に異教的要素が、後者にユダヤ教的要素が認識される。それゆえ、ヨハネが選び出されたのは（このことはパウロの活動的な生涯との対比でヨハネの生涯そのものを示しているように思える）、未来の、初めて真に普遍的な教会の使徒であること、つまり、すでに以前ユダヤ教的方法で教会の中に存在していた人々に対して、その時まで教会の外にいたが、この意味で異教徒たちであった人々を今また受け入れるために、二度目に開かれた教会の使徒であることのためである（それどころか、ユダヤ教的な心を抱いている者からキリスト教へ改宗した多くの者が、この頃異教徒たちと呼ばれているように、——しかもこれら異教徒たちによって、教会がユダヤ教的束縛による以上に称賛されることは、容易に可能である）。——ヨハネは、着飾った花嫁が自分の夫に対して準備するように、彼自らが天から下りて来るのを見たあの第二の新しいエルサレム「ヨハネの黙示録」二一章九節以下。ここに新しいエルサレムに関する記述がある」、つまり異教徒たちもユダヤ教徒たちも等しく入っていくもはや何もかも閉め出さない神の都（その時まで対立は持続する）という未来の、初めて真に普遍的な教会の使徒である。この都の中には、異教もユダヤ教も等しく含まれており、この都は制限を加える強制も、いかなる種類のものであれ、外面的な権威もなく、自分自身で存立する。なぜ

ならば、あらゆる人が自発的に近寄り、あらゆる人が、自らの霊「精神」が都の中に故郷を見出したことによる自らの確信によって、この都に所属するからである。しかも、まさにそれゆえ、ヨハネは、主がつねにすぐ近くにおいておいた主のお気に入りでもあった。というのは、主が愛する者たちに主は完成者の仕事を与えるからである。

使徒たちが列挙される際に、ヨハネは必ずしも三番目に挙げられないとしても、彼は自分自身によって、つまり彼の書物と同様彼の生涯によつて三番目の使徒、未来の使徒である。言い換えれば、ヨハネはキリスト教が普遍的認識の対象となり、キリスト教が以前の教義的諸宗派の、偏狭にゆがんで萎縮したみすばらしいキリスト教ではもはやなく、ましてや、光を恐れる惨めな諸形式の中に一時しのぎに閉じ込められたキリスト教ではなく、同じく、私的キリスト教Privatchristentumへと切り刻まれたキリスト教でもなく、キリスト教が——国家の宗教Staatsreligionとしてではなく、高教会Hochkirche「英国国教会の一派」としてではなく、キリスト教の中に同時に最高の学問を所有する人類の宗教として「——」初めて真に公的宗教öffentliche Religionである究極的時代の使徒である。それ以外の何ものも、もはやドイツ人たちのキリスト教ではありえない。宗教改革後、私たちはキリスト教を私たちのもの以上には、いずれにせよ、もはや尊重しえない。

キリストがヨハネを未来に対して選定したことは、『ヨハネによる福音書』最終章の物語から最も決定的に生じる。さもないと、この物語もたいそう謎めいたものに見えるかもしれない。ここでは、キリストが復活後、三度目に弟子たちに現れた時、キリスト

329

がペトロに問う。ヨナの子「ヨナはペトロの父ヨハネの別名。『マタイによる福音書』一六章一七節参照」シモン、あなたは私をこの者たち（他の弟子たち）以上に愛するか、と「ヨハネによる福音書」二二章一五節。・・・ヨハネの子シモン、この人たちが以上にわたしを愛しているか・・・」。／これは明らかにペトロの話、つまりすべての人があなたを否定したとしても、私はあなたを否定しないだろう。に關係していた「マタイによる福音書」二六章三三節。・・・たとえ、みんながあなたにつまずいてもわたしは決してつまずきません・・・」。深く感じているペトロはこの問いにただ答えて言うには、はい、主よ、あなたは、私があなたを愛していることをご存じです、と「ヨハネによる福音書」二二章一五節」。二度目に主は、彼の痛ましい想いに免じ、簡単に問う。ヨナの子シモン、あなたは私を愛するか、と「同書同章一六節」。ペトロは同じことを答える。三度目に主は問う。今ペトロは心を暗くされ、そして答える。主よ、あなたはすべてをご存じです。あなたは、私があなたを愛していることを、ご存じです「同書同章一七節」。ペトロの各々の返答の後に、キリストは私の子羊を飼いなさい、と言う「同書同章一七節」。三度目にキリストはこの命令に、ペトロの将来の死に様を暗示する言葉を付け加え、それから付け足す。私に従いなさい、と「同書同章一九節」。しかし、ペトロは振り返ることにより、彼は、主が愛していた弟子を見、そして問う。主よ、この者は何者ですか「同書同章二二節」。キリストは彼が愛した弟子よりペトロを優先している、ということこそペトロは理解しない。ペトロは、自分がこの者ほどキリストの近くにいない、と

いうことを自ら知っているし、この者が以前のようにつねに主によつて、また結局主によつて仲間になれる、ということを目指していた（なおペトロとヨハネは、過越しの食事を整えるために、一緒に派遣された）。しかし、イエスはペトロに、私が来るまで、この者が留まっていることを私が欲したとしても、このことはあなたに何の関係があるのだろうか。あなたは私に従いなさい（sy acooutei moi 「あなたは私の後についてきなさい」）、と答える（同書同章二三節）。ヨハネにおける物語そのものがすでに注意していることは、この言葉から、ヨハネは死なないであろう、という話が出ている、ということである。つまり、長い間保持され、様々な時代にあらためて浮かび上がり、しかも同時に、キリストが実際に、私が来るまで、彼が留まることを、私が欲するとしても、と言った、という事実そのものの真理を保証する意見が出ている、ということである。同時にこの状況は、キリストがペトロに、彼と一緒に去ることを勧め、そしてペトロが、ヨハネと一緒に行くべきでないのかどうか尋ねる、というあらゆる説明の内の最も面白い説明に反駁を加える。これにイエスは答える。私があなたから離れる私の歩みから戻つて来るまで、彼が留まっている（つまりここでは立ち止まっている）等々と、私が欲するとしても、と。しかしながら、そう重要でないことは記載されないのが普通であり、しかも *heos etchomai* 「戻つてくるまでは」は、私が戻つてくるまでではなく、私が来るまでを意味する。しかも別の箇所から、キリストが自ら来ることで何を理解しているか、が知られる。／しかし、実際にこの来ることを世界の終わりにキリストが来ることと取り、ヨハネが

留まることを死なないこと、つまり生きながらえることと取るならば、ヨハネはそもそも死なないであろう（というのは、キリストが来たならば、いかなる死ももはや存在しないからである）、という解釈は、もちろん唯一可能な解釈であつた。それにもかかわらず、ヨハネは死んだ。この解釈も福音そのものによつて反駁される。困難を解消するために適用したどんな手段も、長たらしい、と言われるであろう。それゆえ、キリストの話の中で留まること（*menim* 「留まること」）を生きながらえることから理解することは、何に基づいているのか、と私たちは尋ねる。なぜならば、*menim* 「留まること」は他でもそのように用いられ（¹）、ここでも、あらかじめペトロの死の話があるからである。しかしながら、この者は何者ですか、というペトロの問いは、ペトロの将来の死に様を暗示する言葉に直接にはつながっていない、ということが見落とされた。明らかに「つながっていない」ということが意味するのは、イエスがペトロに 私に従いなさいと言った、ということが語られている、ということである。ここで、イエスが実際に、行き、離れる、という次の物語のために、イエスに従つてペトロに勧めることは現実的な、いわば象徴的な分離（他の使徒たちからペトロを隔離すること）である、ということが考えられなければならない。しかし、今まで決して閉め出されなかったのを見られていたヨハネは、今もキリストに従っている。その上でペトロは、この者は何者ですか、と言つた。意味は、この者がどうしてまた、あなたに従つてはならないのですか、である。*menim* 「留まること」がここでも生き延びることを意味すべきであるならば、それはまったく非常識な答えであつ

たろう。この答えは、この者も、私のように、死ぬべきかと
 ペトロが問うた時、考えられるにすぎないであろう。 *apothanein*
 「死ぬこと」が先行したならば、 *meinein* 「留まること」は *me*
apothanein 「決して死なないこと」以外の何も意味しえなかった
 であろう。けれども、 *acoulouthein* 「ついて行くこと」が先行する
 ので、 *meinein* 「留まること」は *me* *acoulouthein* 「決してついて行
 かないこと」に従わないこと以外の何も意味しえない。それゆえ、
 意味は、この者が私に従わないことを、私が欲しようとも、そ
 れはあなたに何の関係があるのか。あなたは私に従いなさい、*sy*
acoulouthei moi 「あなたは私の後についてきなさい」、というも
 のである。それゆえ、ペトロは直接キリストの後継者である。ヨ
 ハネは、キリストがやって来る時にようやく彼の後継者である。
 というのは、そのように言葉がうまく説明されるからである。つ
 まり、ヨハネは、キリストが現実的に来る瞬間に初めて現れるの
 ではなく（というのは、その時にはもはや代理は必要ないである
 うからである）、ノ聖ヨハネの機能は、主がやって来る時 *Zeit* と
 共に、それゆえ、教会の究極的時代 *Zeit* と共に始まるからである。
 （一）『コリントの信徒への手紙』一五章六節のうちに。 *ex hōn hoi*
pleious menousin heōs harti, tines de cai ecomēthēsan. 「彼らのうち
 の多くの人は今なお留ま^つているが、しかし何人かは永眠^{して}いる」。

その上私がこの物語から離れる前に、私が注意しておきたいこ
 とは、『ヨハネによる福音書』の最終章がすでにグロテュウス
 [Hugo Grotius, 1583-1645 オランダの法学者、神学者、政治家。
Annotationes in Libros Evangeliorum, p.571a 参照] 以来、後世の
 付加あるいは追加と見なされている、という点である。このこ

とが受け入れられるならば、疑いえない純粋な事実として、つね
 に一つのことが残る。それは、主が語った言葉によって、キリス
 ト教徒たちの間に、ヨハネは死なない、という意見が広がった、
 ということである。ところが、物語そのものが注意するように、
 意味はこのことではありえなかったのであるから、言葉は単に次
 の意味を持ちただけであった。ヨハネは、キリストの未来の時
 代まで、別の関係において保存されるべきであり、しかも話がヨ
 ハネの実存に^レ関係しなかったならば、話はヨハネの作用や彼の役
 目^にのみ関係しえなし、関連から見ても、ヨハネがペトロのように
 キリストの直接的後継者ではなく、ヨハネが究極的時代に初めて
 教会の支配的ポテンツであるべきである、ということにのみ関係
 しえた。「これがその意味である」。ヨハネの機能は当然、ペトロ
 の独占が完全に克服され、しかも教会が実際に一人の牧者と一つ
 の群れ「シラ書」一八章一三節。・・・主は、・・・羊飼いの
 ように、羊の群れを・・・」であるような究極的統一を達成する
 以前には作用し始めえない。この言葉は『ヨハネ』による福音書
 にのみ存在する。この言葉は、ヨハネが教会の究極的時代に属し
 たいそう多くの教会が他の使徒たちや聖人たち、殊にバプテスマ
 のヨハネに捧げられたが、ほとんど使徒ヨハネに捧げられない、
 ということの予感であるのだろうか。序列から見ても、ローマとカ
 トリック世界の最初の教会である、ローマのラテラノの聖ヨハネ
 教会「聖ヨハネ・ラテラノ大聖堂のこと」は、その教会の一つの
 礼拝堂が福音著者ヨハネに捧げられているけれども、ラテン語の
 刻印 *Sacrosancta Lateranensis ecclesia, omnium urbis et orbis*
ecclesiarum mater et caput 「シラヌスの聖教会は、すべての都

市と天空の教会の母であり、頭である」が語るように、その教会の最も古い部分からして、洗礼堂である。聖ペトロの壮麗な教会堂はローマの中心部にあるが、その建物は宗教改革への最も深い誘因の一つを与えたに違いなかった。ピウス七世 [Pius, 1742-1823 在位1800-1823 ローマ教皇。前名ルイージ・バルナバ・キアラモンティ] の治世の終わり頃、炎上し今もまだ完全には修復されていない、聖パウロの教会は、ノ市城壁の前「外側」に建っている。私が現在、教会を建てなければならなかったら、私はその教会を聖ヨハネに捧げるであらう。しかし、遅かれ早かれ、使徒の頭目たち三人を結びつける一つの教会が建立されるであらう。というのは、究極的ポテンツは以前の諸ポテンツを廃棄したり、あるいは閉め出したりせず、それらを変容し、自らの内に取り入れるからである。その時、この教会はキリスト教教会史の真のパンテオンであるであらう。

* * *

私がこの未来にまで展開し続けたのであるから、私は、啓示の哲学が一巡しなければならぬ全行程を、諸事情が許す限りで旅してきたと思う。したがって、私は今ではもう、二、三の一般的注意をすることで、この講義を終わりたい。

キリスト教は世界の基礎付け以来用意されていたし、キリスト教は世界諸原理 Weltpincipien そのものの諸関係の中にすでに存在している思想を実行することにすぎない。この秩序の外では、それゆえ、キリスト教はいかなる救いも与えないし、私たちはこ

の秩序に慣れねばならないし、この秩序に順応しなければならぬ。個々人にとつて、何か特別なことが生じうるのではない。誰も、初めから置かれていたのとは別の、諸事物の基礎を置くことはできないし、私たちはその必然的な順序に²⁰⁶に従わねばならない。私たちはこの規定された世界の中で生き、私たちは抽象的なつまり普遍的な世界の中には存在しない。私たちは、諸事物の現実的諸関係に通暁することなしに、ただ諸事物の最も普遍的な諸性質に準拠することにより、私たちがたいそう喜んで本当であるかのように見なしている抽象的なつまり普遍的な世界の中に、私たちは存在していない。私たちは、現在が基づいている無限な過去を廃棄することはできない。多くの人々が思いこんでいるように、まさに世界において、すべてのものが單純に關連しあっているのではない。諸事物や世界の現状は、無限に制限された状態である。とりわけ単に、広さと普遍さを喜ぶ人は、この秩序を狭いし制限されている、と呼ぶかもしれない。世界は別のものではないし、世界は制限や限界のないものではなく、非常に明確な制限の中に含まれているものである。最高のことはもちろん精神「靈」において神を認識し崇拜することであるが、キリストが要求するように、このことがまた實際に生じるためには「ヨハネによる福音書」四章二三節。・・・靈と真理とを持って神を礼拝する・・・一、ノ何か抽象的で偶像的なものではなく、私たちが崇拜する 所業を通して啓示された現実の神 が存在する、ということがある。けれども、使徒はまた、子が 子にすべてのものを従属させた者 に従属するであらうし、しかも神がすべてにおいてすべてであり、それゆえ、神の外で、神から独立に

定立された子と共に与えられたこの外面的な準備が廢れるであろうあの時を終わりと示した「コリントの信徒への手紙一」一五章二八節。すべてが御子に服従するとき、御子自身も、すべてを御自分に服従させてくださった方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。」つまり使徒はこの時を終わりとして定立した。しかも、神の究極的なすべてにおいてすべてであることは、私たちの言う有神論者たちや合理主義者たちの意味で決して純粹な有神論ではなく、神のこれらの全行程を前提し、それを自らの内に含んでいるそのような有神論である。

すでに古代の神学者たちは *theologia* 「純粹な神学」、純粹な神学と *oikonomia* 「摂理」とを区別していた。だから、大バシリウス [Basilius, 330頃-379] カップドキア三教父の一人、聖人は彼の手紙のうちの一通で次のように言う。私たちは神学のために摂理を忘れないし、抽象的神論のために歴史的な神論を忘れないのであるから、聖霊によって私たちの知性は守られなければならない、と。私たちはこの経過に向かうよう指示される。教会において伝承されてきたような思弁的な教義を、公開しないままにしてきた宗教改革は、もっぱら内面的な過程や救済論の側面へと向かったが、この救済論は、それが結局独占的な重要性を獲得したことによって、敬虔主義「一六九一年頃から一七三一年頃にかけてドイツのプロテスタント教会を支配した傾向。宗教的生命を失ったルター派正統主義に対する改革運動」を生み出した。内面的過程をあらゆる人は自分で経験しなければならない。すべての人に共通であるもののみが道、つまり、まさにすべての人に共通であるものであるべき教説によって、しかも象徴的行為つま

り（儀礼による）祭りの順序によってすら、現代的に獲得されるべき歴史的経過である。——この経過の認識のみが教会そのものにその客観性を獲得し、しかもこの認識が一面では、たとえ敬虔な主観性であれ、単なる主観性への解消を防ぎ、他面では空虚な普遍的なもの、つまり単なる合理的なものへの解消を防ぐ。

今なお私に残っていることは、あなたがたがこの長い道のりを私に従って忍耐強く参加してくれたことに対して、あなたがたに感謝することである。あるいはむしろ、私は、たいそう真面目で深い内容の講義に、たいそう辛抱強く中断することなく注意を払うことができる、このように極めて多くの聴講者が在籍している大学や都市を称賛したい。／これに対して、私は、あなたがたから何も奪わなかったが、あなたがたに与えた——現実的に積極的なもの、精神を持続的に満たすもの、つまり私は確信しているが将来においてもあなたがたの精神を没頭させるであろうものを与えた「——」という私の言葉を実現した、と考えてよい満足をおなたがたは私に与えてほしい(1)。

(1)「私は自分の言葉を実現する云々、これは、著者が一八四一年から四二年にかけての冬に、啓示の哲学に関する講義を始めたベルリンでの第一講（「本巻の」付録で再び印刷された）での表明を暗に指している。編纂者」

ここに翻訳したものはフリードリッヒ・ヴィルヘルム・フォン・シェリングの『啓示の哲学』（一八四二年）第二部第三書の第三六講と第三七講である。これで本書全三七講すべてを訳したことに

なる。次回以降に本書付録として掲載されている「積極的哲学の諸原理の別の演繹」ならびに一八四一年から四二年にかけての冬に、啓示の哲学に関する講義を始めたベルリンでの第一講を翻訳し、『啓示の哲学』の訳を終えるつもりである。訳者の能力並びに本邦初訳故の誤りを出来る限り少なくするために、忌憚のないご批評ご指摘をお願いいたします。(18)以前については弘前大学人文学部紀要第一八号を参照されたい。

なお「」のなかすべて訳者の補いであり、
は文章を明確にするために訳者が適宜付け加えたものである。欄外の数字は原文のおよそのページ数である。